MUKAIBAYASHI SITE

向林遺跡

―― 平成10年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書――

1999. 3

茅野市教育委員会

MUKAIBAYASHI SITE

向林遺跡

―― 平成10年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

1999. 3

茅野市教育委員会

向林遺跡全景（平成10年９月29日撮影）

序　文

向林遺跡は平成10年度県営圃場整備事業米沢地区の施工に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものであります。

向林遺跡は当初採集された遺物も少量で、規模等に不明確な部分がありましたが、今回の発掘調査によりその全貌が明らかになり、遺跡の性格が明確になりました。

発掘調査の結果、縄文時代早期押型文期の竪穴住居址が10軒、前期末の竪穴住居址1軒と、平安時代の竪穴住居址2軒と数多くの土坑が確認されました。本遺跡の立地する霧ヶ峰南麓は国宝土偶を出土した棚畑遺跡や、黒耀石製石器の製作遺跡と考えられている拠点的集落である国史跡駒形遺跡など多くの遺跡が点在する地域であり、本遺跡と駒形遺跡は指呼の距離にあり、その遺跡間の相互関係について興味深いものがあります。

霧ヶ峰南麓の考古学的調査は、古くより地元研究者の田實文朗氏や宮坂英弐氏等により行われ、黒耀石製石器の採集量の多さや遺跡の継続時期が長いとの特徴が指摘され、八ヶ岳西南麓に展開する遺跡群と性格の異なりがあることが考えられています。霧ヶ峰南麓に立地する遺跡群は黒耀石製石器の生産の場として捉えられ、石鏃等を製作し流通拠点としての性格が与えられていますが、今回の調査においてはこのようなことを検証する資料は得られてはいません。しかし、今回得られた情報をもとに今後この地域における生活領域の復元や遺跡間の相互関係、生業問題を解明することが必要です。

米沢地区における埋蔵文化財の調査は平成6年度の上の平遺跡に始まり、平成9・10年度の一ノ瀬・芝ノ木遺跡、八幡坂遺跡の調査と3ヶ所の遺跡の記録保存がなされ、米沢地区における重要な歴史的情報を得ることができました。これらの情報を基に米沢地区における地域史が再編され、当地における縄文時代早期や平安時代のより具体的な生活の様子が解明されることでしょう。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市土地改良課の皆様の深いご理解とご助力、調査ならびに作業にあたられた皆様のご苦労により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成11年3月

茅野市教育委員会

教育長　両角　源美

例　　言

1．本書は、長野県諏訪地方事務所長香坂守義と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した平成10年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う、長野県茅野市向林遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査・遺物整理・報告書刊行は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助平成10年度国宝重要文化財等保存整備費補助金市内遺跡発掘調査並びに県費補助金平成10年度文化財保護事業補助金市内遺跡発掘調査、市費を得て、茅野市教育委員会が平成10年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第１節５．調査の体制として記載してある。

3．発掘調査は平成10年６月15日から10月30日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は発掘調査終了後茅野市文化財課において行った。

4．発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆分担等は第Ⅰ章第１節５に記してある。

5．本報告に係る出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財課で収蔵保管している。

凡　　例

1．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

2．本報告書に掲載の住居址・土坑の遺構実測図は1/60、土器実測図は1/3・1/6、土器拓本1/2、大型石器は1/3、小型石器1/1・2/3の縮尺とした。

3．土層の色調については『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

4．挿図中におけるスクリーントーンは遺構部分では焼土、遺物出土状態のインレタは遺物の種別を、また、遺物部分は須恵器を示した。

目　　次

序　　文　　茅野市教育委員会　教育長　両角源美
例　　言
凡　　例

第Ⅰ章　発掘調査の概要……1
　第１節　発掘調査に至るまでの経過……1

第Ⅱ章　遺跡の概観……5
　第１節　遺跡の位置と環境……5
　第２節　周辺の歴史的環境……6

第Ⅲ章　遺跡の層序と調査区の概要……8
　第１節　調査区の基本的層序……8

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物……9
　第１節　縄文時代早期・前期の遺構と遺物……9
　第２節　平安時代の遺構と遺物……36
　第３節　縄文時代・平安時代・近世の遺物……38

第Ⅴ章　調査の成果と課題……42
　第１節　向林遺跡の縄文時代早期集落の概要……42

図　　版
抄　　録

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査に至るまでの経過

１．調査に至るまでの協議

遺跡確認に至るまでの経過　本遺跡は畑地耕作がなされ、また、周辺が山林・原野のために遺跡の内容等について不明であった。県営圃場整備事業米沢地区の対象地となった時点で、地域の確認を行い少量の黒耀石剝片が採集されたことにより、遺跡の存在が明確となった。しかし、その規模や時期・性格が不明で、特に遺跡の広がりについては不明な部分が多かった。

平成６年度に農業基盤整備事業にかかる茅野市、原村内の分布調査が長野県教育委員会により計画され、６月米沢地区北大塩地区の表面採集調査が行われた。その結果向林において、黒耀石1,254ｇ、石鏃17、打製石斧２、平安時代土師器片２、近世陶磁器片１が採集され、縄文時代早期の遺跡の可能性が指摘された。

遺跡範囲確認のために対象地周辺の表面採集や試掘調査により、遺跡範囲の確定や遺跡内容の確認を目的に、平成９年12月18日・19日の２日間に亘って重機による試掘調査が実施された。その結果縄文時代早期竪穴住居址１や時期不明の竪穴、土坑が扇頂部付近を中心に検出されたが、扇端部にも土坑らしき落ち込みが確認され、かなり広範囲に遺構が点在する可能性を把握できた。

本調査に至るまでの協議経過と諸事務　平成９年11月17日に平成10年度圃場計画地内の遺跡の保護協議が長野県教育委員会文化財保護課・諏訪地方事務所土地改良課・茅野市土地改良課・茅野市教育委員会文化財課により行われ、結果記録保存の方向が決定された。この協議結果は県営圃場整備事業米沢地区着工に先立ち5,000㎡以上の発掘調査を実施し、発掘調査に係る経費は、事業主体者が負担する。ただし、経費のうち農家負担分(12%)については文化財保護側が負担する。この計画は総額16,800,000円(農政部局負担14,784,000円、文化財負担2,016,000円）で事業を行い、発掘調査は茅野市教育委員会に委託するというものであった。

平成10年度の圃場関係の調査計画については、平成９年12月、平成10年度文化財関係補助事業計画を提出して事業に備えた。当初計画よりも遺跡規模等が縮小したため年度途中に全体計画を見直し、変更申請を提出し全体計画を総額14,000,000円（農政部局負担12,320,000円、文化財負担1,680,000円）で事業を行った。

保護協議結果を受けて平成10年４月14日付10諏地土第５－６号、埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を諏訪地方事務所長香坂守義と取り交わした。

また、文化財補助金申請等事務・発掘諸法令事務を下記の通り行った。

発掘調査による文化財補助金申請等事務経過

平成10年４月22日　10教文第１号　平成10年度文化財関係国庫事業について（通知）

平成10年12月14日　10教文第２-28号　平成10年度文化財保護事業補助金について（通知）

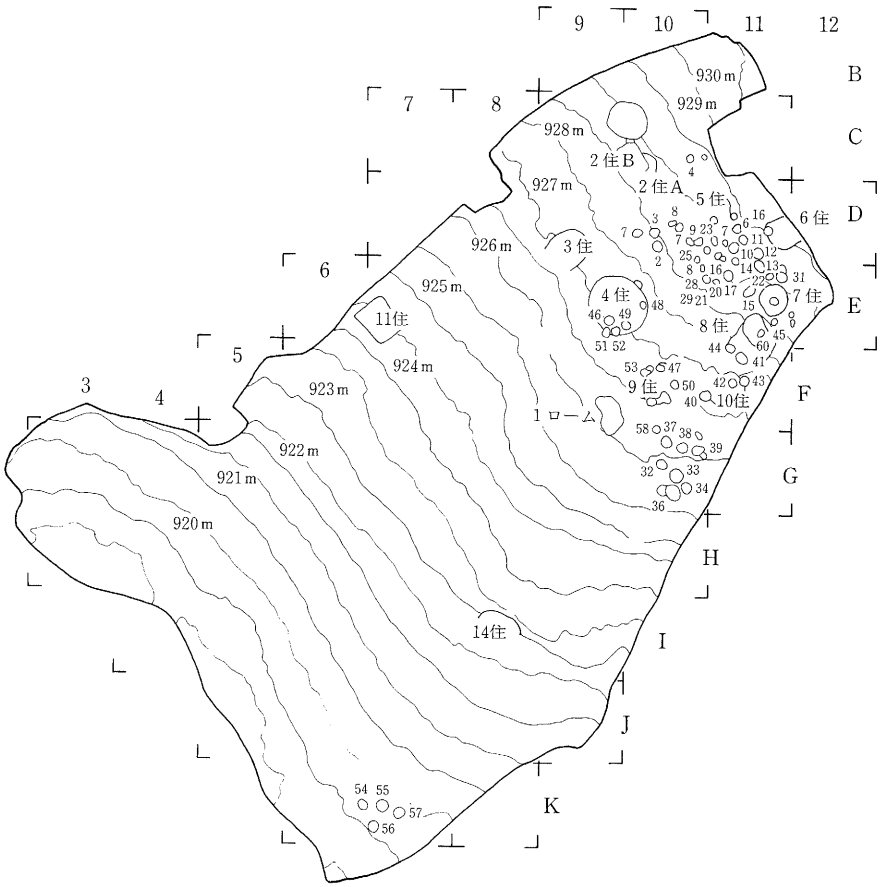
平成10年５月８日　10教文第11-４号　平成10年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

平成10年11月６日　10教文第67-１号　平成10年度文化財保護事業補助金申請書提出

発掘諸法令事務の経過

平成10年３月19日　９教文第119-６号　向林遺跡埋蔵文化財発掘通知（57条３第１項）の提出

平成10年４月８日　10教文第２-３号　向林遺跡埋蔵文化財発掘通知（98条２第１項）の提出



第1図　調査区と遺構全体図（1/900）

2．発掘調査の方法とその経過

調査区の設定と発掘調査の方法　試掘調査により遺構は扇状地全体広範囲に点在していることが把握された。この試掘調査結果をもとに調査範囲を決定し、最終調査面積は5,000㎡となった。調査区のグリッド設定は、公共座標X＝3950、Y＝－28410、標高929.028mを基準とし、10mピッチのグリッドを設定した。

遺構測量　遺構の測量は写真測量を実施しこの図を基本としたが、遺物の平面分布、遺物の出土状態や土坑内の礫等については、遣り方測量や平板測量の成果を写真測量図に反映させた。基本土層の観察は、畑地内は耕作等の関係よりプライマリーな土層堆積を示している地点はなかったが、最も土層の遺存状態の良好であったC－7西壁において行った。平面図作成作業と、レベル測量を並行して行った。なお、発掘現場における諸記録は守矢昌文、遠藤佳子、塩原博子、篠原リカ子、宮坂ひとみが携わった。

3．調査日誌（抄）

6月15日　テント及びシート等の機材を搬入する。

6月17日　重機を用いて発掘調査に入る。遺跡上方から表土剝ぎ作業を実施する。

6月23日　重機を用いて発掘調査の継続。調査区北西側を中心に縄文時代早期の遺構が数ヶ所検出される。

5月15日　トレンチ調査の継続と、調査区全体図の作成を実施する。本日で調査を終了する。

7月1日　遺構確認作業の継続。縄文時代早期押型文期、前期末、平安時代の竪穴住居址が確認される。

7月7日　竪穴住居址の掘り下げを開始。試掘調査により確認されたものより、第1号住居址とする。

7月13日　第1号・第2号住居址のセクションベルト除去作業。第3号・4号住居址の掘り下げ作業の継続。第3号住居址床面より尖底部が出土する。

7月23日　第6号住居址までの調査に入る。また、周辺に点在する土坑の半割作業も並行して行う。

7月30日　長野県教育委員会遺跡指導委員会委員現地視察。第7号住居址掘り下げ作業に入る。

8月5日　第7号・第8号・第9号住居址の調査に入る。

8月10日　坪井清足氏夫妻、聖光寺松久保住職来跡。

8月19日　残暑厳しい一日。第7号住居址の遺物取上げ作業を実施する。床面直上より縄文時代前期末深鉢が2個体床面に密着した状態で出土する。

8月27日　第11号・第14号住居址の掘り下げ作業を開始する。第11号住居址カマド脇より須恵器横瓶出土。

9月17日　住居址の清掃作業と写真撮影。写真測量の打合せを行う。

9月29日　昨日の写真測量が天候のために順延となったために、本日の実施となる。

10月2日　昨日までの降雨のため遺構内が水浸しとなる。この水の除去作業を実施。

10月22日　八ヶ岳に初冠雪。第11号住居址のカマドの精査。

10月30日　調査区最終点検と機材の搬出作業を実施する。

4．遺物整理・報告書の作成

遺物の整理　遺物整理・報告書作成は他の事業の合間を縫い、調査終了後から実施した。遺構・遺物の内、縄文時代早期の資料に重点を置き整理を実施し、早期押型文土器については文様の判明している資料は極力図示に努めた。住居址覆土内からの早期前半の遺物については、その出土位置や出土層位、また、覆土内に含有されている礫との供伴関係等に注意しその出土位置を記録に留めた。表土から遺構確認面まで重機を用いて土砂を削除したことから、時期別の遺物包含層の状況について観察することができなかった。

表面採集による遺物も含めると、縄文時代早期前半、早期末、前期中葉、前期末土器片、黒耀石製石鏃、スクレイパー、砕片、剝片、打製石斧、磨製石斧、横刃型石器、磨石、凹石、平安時代土師器長胴甕、土師器坏、須恵器横瓶、須恵器坏、染付皿、寛永通寶が検出されているが、量的には多くはない。そのため遺物の洗浄等の整理は短期間で終了した。注記の略号は遺跡番号の37を冠し、遺構名、地点・層位の順とした。

5．調査の体制

調査主体者　両角徹郎（茅野市教育委員会教育長　平成10年4月1日より5月10日）
　　両角源美（茅野市教育委員会教育長　平成10年7月31日より）

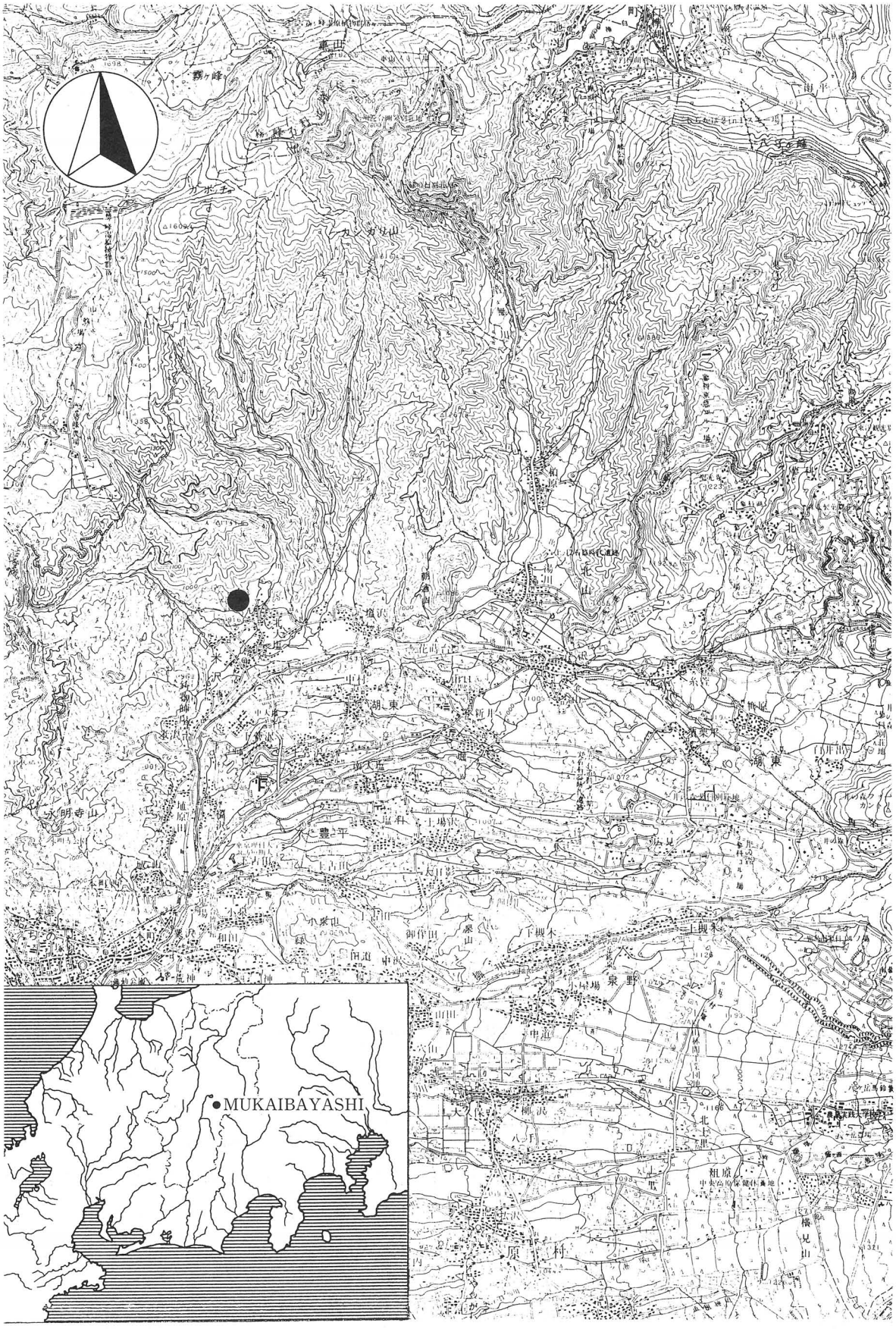
事　務　局　宮下安雄（茅野市教育委員会教育次長）
　　矢嶋秀一（文化財課長）　鵜飼幸雄（文化財課文化財係長）　守矢昌文　小林深志　大谷勝己
　　功刀　司　小池岳史　百瀬一郎　小林健治　柳川英司　大月三千代

調査担当者・報告書執筆　守矢昌文　　調査補助員　牛山徳博　野島暁子

発掘調査・整理作業協力者　内田友一　遠藤佳子　栗原　昇　小平　寛　小松　要　塩原博子
　　篠原リカ子　長石頼文　樋口　豊　藤森きみ江　北條嘉久男　前島克夫　丸山寿美子
　　宮坂　勇　宮坂ひとみ　三輪辰秋　吉田キヨ子　吉田幸男　吉田　實

発掘調査期間中、遺物整理期間中、諏訪地方事務所土地改良課並びに、米沢区圃場整備委員会を始め地権者の方々にご助力頂き、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し明記したい。長野県教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係指導主事原 明芳氏を始め下記の方々より有益なご指導・ご助言を頂いた。記して感謝を申し上げたい。

坪井清足　戸沢充則　長峯光一　宮坂光昭　樋口昇一　神村　透　会田　進　小安和順　斎藤　弘
中西眞也　田中　総　宮坂　清



第２図　向林遺跡位置図（1/37,500）

第II章　遺跡の概観

第１節　遺跡の位置と環境

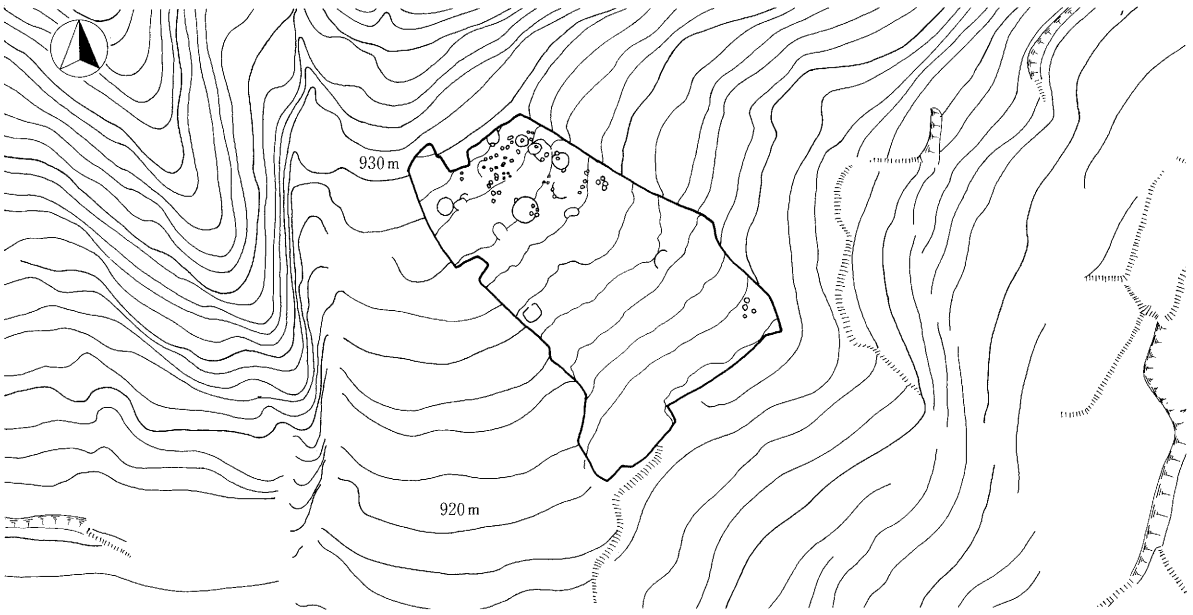
１．遺跡の立地と地理的環境

遺跡の位置　向林遺跡は長野県茅野市米沢5,598番地他に所在する。霧ヶ峰山塊は市域の北西隅に占地し、調査地のある向林遺跡はＪＲ中央本線茅野駅から北東方向に約６㎞のちょうど霧ヶ峰南麓のほぼ中央部よりやや東側にあたり、遺跡の位置する下方に米沢北大塩の集落が位置する。

遺跡の地理的環境　向林遺跡の位置する霧ヶ峰南麓は永明寺山・朝倉山・カシガリ山が位置し、これらの山裾からは東より藤原川・前嶋川・桧沢川・横河川等の小河川が流れ下り、山裾に扇状地を形成する。

この霧ヶ峰南麓地域を巨視的に見ると、大きく内彎し霧ヶ峰南麓から流下する河川により浸食され、大きく３ブロックに分かれる。分断された地域内は河川による扇状地が発達し、扇状地単位で遺跡が群となる傾向が見受けられる。これらの扇状地に接する形で上川による沖積地が発達しており、扇状地と沖積地との接する部分に、東より塩沢・一本木・北大塩・鋳物師屋・埴原田の集落が展開する。霧ヶ峰南麓を流下する河川により浸食されている谷を遡ると、その源流は霧ヶ峰池のくるみにまで至り、霧ヶ峰のなだらかな丘を進むと、黒耀石の原産地である和田峠周辺となる。本遺跡から黒耀石原産地までは直線距離にして約16㎞を測りその距離は約１日行程の範囲にある。

本遺跡は霧ヶ峰南麓に多い扇状地地形に立地する。この扇状地は、遺跡上部の山裾が崩落し所謂ホウロク地形となった部分より小河川に沿って流下し堆積した扇状地に位置する。遺跡は扇状地の扇頂部付近に位置している。遺跡の立地している扇状地は詳細に観察すると、遺跡西側に流れる小河川により形成されたものと考えられ、扇状地内には小さな起伏が認められる他、氾濫等で堆積した巨岩が部分的に露出し、また、基盤層内には多量の礫を含んでいる。扇状地は扇頂部付近は傾斜が割合緩やかであるのに対して、扇央部や扇端部は急傾斜である。



第３図　周辺の地形と遺跡分布図（1/2,000）

霧ヶ峰南麓は市域において湧水の豊富な地域で、市最大の水源である大清水などがある。このような湧水は霧ヶ峰南麓の伏流水が中心となり、遺跡北側に位置する小規模な入り組み谷からも、毎時変わらぬ伏流水の湧出が認められる。扇状地上部から流下する小河川もあり、また、雨天の日が続くと基盤礫層内より水の滲み出しが認められ、土坑内が水没するような状況も認められた。

第2節　周辺の歴史的環境

1．遺跡周辺の遺跡とその地理的位置

周辺の遺跡の地理的位置　霧ヶ峰南麓は霧ヶ峰山塊の支峰である朝倉山から永明寺山までの約3.6kmに亘る。この地域は大きく弧状となり、藤原川・前嶋川・桧沢川・横河川等の河川が流れ下り、これらの下部には扇状地が発達する。これらの扇状地や崖錐地等には遺跡が展開する。これらの遺跡は大きく扇状地単位に大きなグループを形成している。また、扇頂部にあたる藤原川・前嶋川・桧沢川・横河川の沢筋の一部には、黒耀石が散布する地点が認められ、黒耀石の運搬ルートに関わったと想定されている。

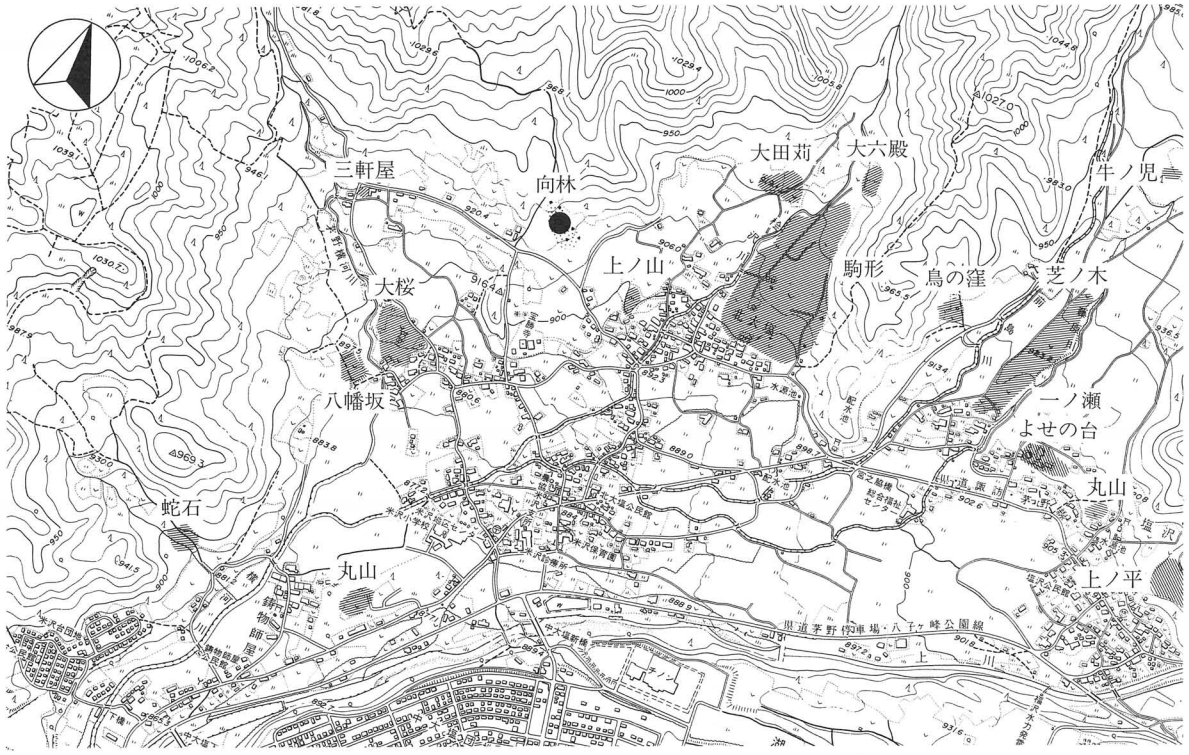
桧沢川による扇状地のグループ　桧沢川により形成された扇状地は霧ヶ峰南麓の内で最も幅広い扇状地を形成している。この最も広い扇状地の扇頂部に菖蒲沢遺跡、大六殿遺跡、扇央部に駒形遺跡が立地している。これらの扇状地端部にはやや特異な孤立台地状の地形が形成され、上の山遺跡・買地遺跡が立地する。また、扇状地を望む山裾の斜面台地には大田苅遺跡が占地する。桧沢川による扇状地グループの代表的な遺跡は次のようである。

駒形遺跡　桧沢川の形成した扇状地の扇央部に位置し、標高は910ｍを測る。遺跡の中央には駒形社の石祠が祀られ、「駒見石」と呼ばれる巨石や牧にちなむ小字が残る点などより信濃十六牧の一つである山鹿牧または大塩牧との関連も想定されている。遺跡は古くから土器や石器の採取地として著名で、米沢地区の考古学的調査を精力的に行った田実文朗氏も常に実踏されていたようで、多量の黒耀石製石器等を採集している。昭和36年に諏訪実業高校地歴部が、尖石考古館宮坂英弐氏の指導により発掘調査を実施し、縄文時代前期前半１、中期後半１の竪穴住居址、後期配石遺構、土坑が検出されている。(文献１)昭和41年に第２次調査を実施し、縄文時代中期後半竪穴住居址２が検出されている。(文献２)平成６年に長野県教育委員会により農業基盤整備事業に係る茅野市、原村内の分布調査が実施され、その一環として県営圃場整備事業の計画されている北大塩地区の縄文時代遺跡について、駒形遺跡を中心に試掘調査を伴う詳細分布調査が実施され、縄文時代早期末～前期初頭４、前期初頭２、前期前半２、中期中葉４、中期後半10、不明５の竪穴住居址、旧石器時代、縄文時代早期末から後期末、平安時代、中世、近世の遺物が検出されている。また、従来より注目されていた黒耀石も重量にして20kgもの原石・剥片・砕片が採集されている。調査により本遺跡が拠点集落で黒耀石製石器生産に関わっていた可能性が考えられている。(文献３)これらの成果をもとに平成９年度国史跡に指定された。

大六殿遺跡　駒形遺跡の立地する扇状地扇頂部に位置し、標高は930ｍを測る。その内容については不明であるが、表面採集により縄文時代中期土器片、石鏃、黒耀石剥片が採集されている。立地等より考えると本遺跡は駒形遺跡の支村の可能性が強い。

菖蒲沢遺跡　大六殿遺跡と桧沢川を隔てた扇状地扇頂に位置している。平成６年に長野県教育委員会により実施された米沢地区の実地踏査がなされ、縄文時代前期中葉土器片、黒耀石剥片、打製石斧、平安時代灰釉陶器片が採集され、遺跡の確認がなされた。平成９年に圃場計画対象範囲について試掘調査を実施し、その結果、本遺跡は扇頂部の狭い範囲に位置する散布地的なものであることが確認された。

大田苅遺跡　桧沢扇状地を臨む山裾に開けたテラス状の台地に位置する。平成６年に長野県教育委員会に



第４図　周辺の遺跡とその地理的位置（1/20,000）

より実施された米沢地区の実地踏査がなされ、縄文時代前期後葉、中期中葉土器片、黒耀石剥片が採集され遺跡の確認がなされた。平成９年に圃場計画対象範囲について試掘調査を実施しその結果、縄文時代前期前半、中期初頭の竪穴住居址、土坑、黒耀石集積が検出された。規模的や遺構の密度、遺物の出土傾向を考慮すると、大六殿遺跡と同様に拠点的集落である駒形遺跡の支村の可能性が高い。

出ノ脇遺跡　桧沢扇状地を臨む山裾に位置する遺跡で、平成６年に長野県教育委員会により実施された米沢地区の実地踏査の際に確認された。黒耀石剥片が若干散布しているだけの小規模な散布地で、平成９年に試掘調査を実施した結果、遺構等の確認はなされず、隣接する大田苅遺跡との関係より大田苅遺跡に付属する散布地の可能性が高い。

上の山遺跡　本遺跡は桧沢川扇状地の扇端部に張り出す残丘状の尾根状台地に位置し、標高は900ｍである。縄文時代中期土器片、石皿、石棒、石鏃等が採集されており、中期の小規模な集落と考えられている。

買地遺跡　向林遺跡の位置する扇状地の扇端部に位置する遺跡で、平成６年に長野県教育委員会により実施された米沢地区の実地踏査の際に確認された。平成９年に圃場計画対象範囲について試掘調査を実施しその結果、縄文時代中期竪穴住居址１軒が確認されている。

霧ヶ峰南麓遺跡群の展開　霧ヶ峰南麓特に米沢地域において遺跡が、地形的な制約等から大きなグループを形成している。これらの遺跡はその位置関係や遺構の時期構成から見ると、縄文時代において大きなまとまりを形成していたと考えることができ、扇状地単位や遺跡立地より小グループにまとまる傾向が認められる。また、先学によって多く述べられているように、黒耀石製石器加工を中心とした縄文時代の生業を推定でき得る地域として理解されている。

２．遺跡の研究史

今回の発掘調査以前の考古学的調査　本遺跡は昭和54年度に長野県教育委員会が実施した八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査（文献４）によりその存在が明確となった遺跡である。その際には縄文時代中期の土器片が採集されている。

第Ⅲ章　遺跡の層序と調査区の概要

第１節　調査区の基本的層序

１．土層の基本的な堆積状況

本遺跡の立地している扇状地は、霧ヶ峰起源の火山堆積物である泥・砂・礫を基盤とし、この上部に霧ヶ峰南麓際から崩落し堆積した巨石や礫を多量に含む二次堆積の砂状のロームが堆積する。これに有機物腐食物の堆積物である黒色土が堆積し台地全体を形成している。

調査区全体は畑地造成により、大幅に地形が改変されており、プライマリーな土層の堆積状況を調べられる地点はごく限られた部分だけある。下記に説明を加えてある地点は調査区の最も土層堆積の深い部分である西側壁のものである。発掘調査において縄文時代と平安時代の遺物が検出されているが、包含層の把握や生活面の分層には至っていない。

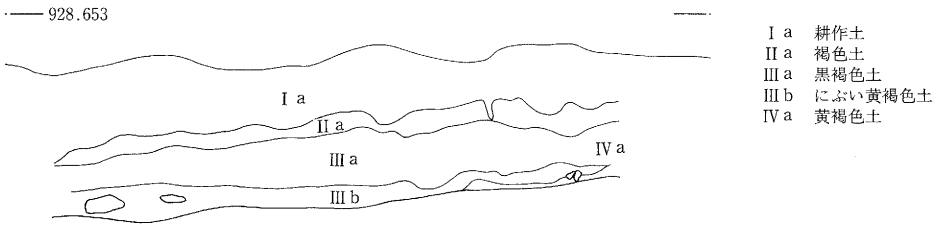
Ⅰａ層　耕作土　色調は黒褐色（10YR2/2）を呈する。全体的にややザラつく。内部にビニール片や１㎜大の炭化物粒子を１％含有する。現在耕作されている畑の耕土で地表に畝痕が観察される。

Ⅱａ層　褐色土　調査区の西側範囲に薄く堆積している土層で、若干粉状でやや軟質。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。内部に２㎜大の炭化物粒子を１％含有する。

Ⅲａ層　黒褐色土　調査区全体に割合厚く堆積していた土層で、締まりがよく割合硬質で、内部に２㎜大の砂粒を２％、１～２㎜大の炭化物を１％含有する。

Ⅲｂ層　にぶい黄褐色土　調査区上半範囲を中心に堆積する土層で、色調はにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈し締まりはよく硬質で礫を含有する。本層の上面より遺構を掘り込む。

Ⅳａ層　黄褐色土　色調は黄褐色（10YR5/6）を呈する。２～５㎜大の砂粒子を３％含有し、所々に地山に含まれる礫が突出する。



第５図　遺跡の基本層序（1/40）

２．土層の成因と性格について

遺跡に堆積する土層を大きくその性格よりⅠ層からⅣ層の４群に分類した。Ⅰ層群は現在の畑地耕作に関わる土層群で、Ⅰａ層がその状況より耕土と思われる。Ⅰ層内は大型農耕機械による攪乱を受けている状況が観察される。Ⅱ層はプライマリーな土層で、本層は調査区の西・北側一部の範囲に認められた。Ⅲ層群が遺物の包含層や遺構確認面にあたり、Ⅲａ層内に遺物が混在する形で認められた。Ⅲｂ層より遺構の覆土と掘り方の判別が可能となる。Ⅲａ層とⅢｂ層とは色調に差があるために、Ⅲｂ層よりの掘り込みが明瞭となったものと考えられるが、本来はⅢａ層が生活面となりこの層より遺構の掘り込みがなされていたものと考えられる。遺構内の覆土は基本的にはⅢａ層に類似する土層である。

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物

第１節　縄文時代早期・前期の遺構と遺物

１．竪穴住居址

縄文時代の竪穴住居址の番号は第14号まで付されているが、ロームマウンドを住居址と遺構確認の段階で誤認していたために、最終的には13軒の竪穴住居址の調査となった。これらの住居址を時期より見ると縄文時代早期前半10、前期末１、平安時代後半２が確認されている。

縄文時代早期前半の住居址は第２号・第８号住居址を除き重複関係はない。

第１号住居址（第６～８図・図版１）

検出状況　本址は試掘調査の段階でその存在が確認された住居址である。そのために壁の北西の一部に試掘トレンチがかかっている。本址の位置は調査区の西側Ｃ－８・９グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地の扇頂に近い位置に占地し、東側に第２号住居址と近接する。南側のプランは地形の関係より他の部分に比べて判然としなかった部分があるが、明瞭な掘り方を有していた他の部分より住居址の平面形プランを把握することができた。

遺構の構造　住居址の平面形プランは、やや東－西方向につぶれる不整円形を呈し、また、やや北側プランの一部が張出し全体的には歪んだ平面プランを呈する。規模は長軸5.04ｍ×短軸4.18ｍで規模的には一般的な住居址である。南北方向に長軸を持ち長軸方向はＮ－28°－Ｅを示す。

壁の立上りは南側は地形の関係より流出して掘り方が低く不明瞭であったが、北、西、東側が明瞭である。壁は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で31㎝、西側で38㎝、東側で26㎝、不明瞭な南側で７㎝を測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは割合緩やかで断面形が皿状を呈し、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

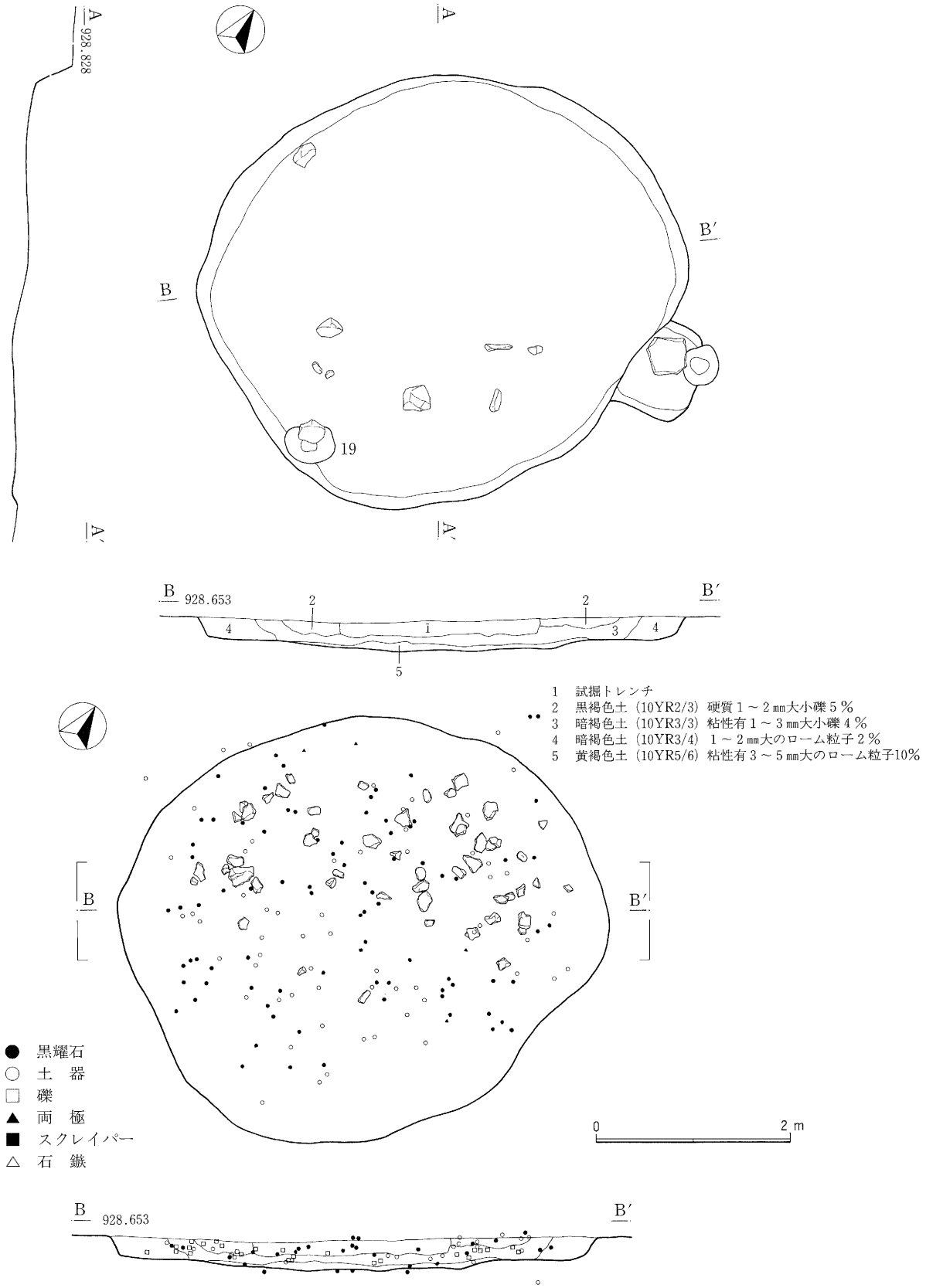
直接地山のローム面床としており軟質な部分は認められない。地山に含まれる礫が突出する部分が見られる。床面は敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することはできなかったが、床面直上に小礫を若干含むやや硬化し締まりを持つ黄褐色土（10YR5/6）が堆積し、この面が床面に相当するものであろうか。床面は中央部に向かい皿状の傾斜を持つ。

周溝や壁際を巡る小孔、柱穴、炉址は検出されていない。

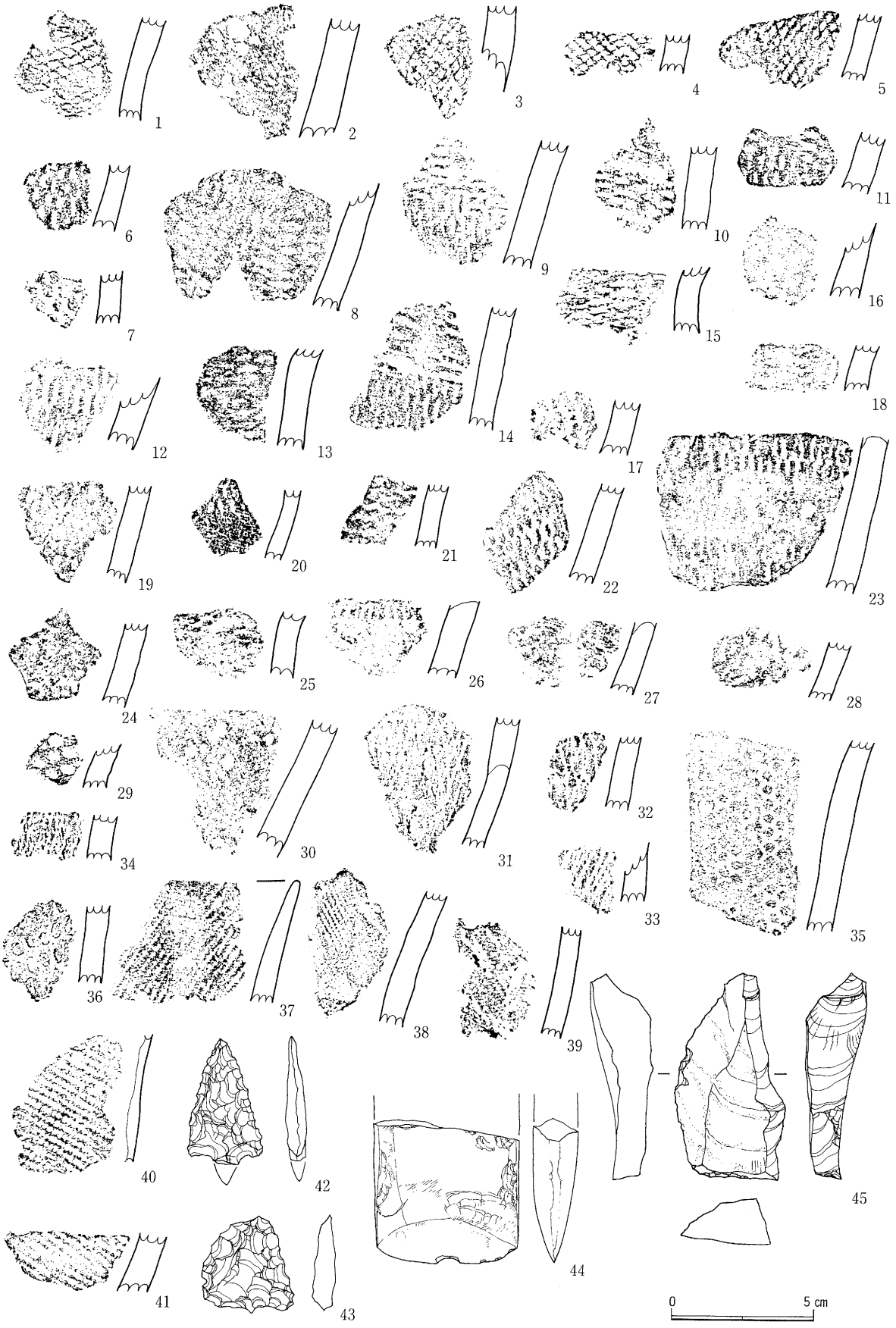
覆土はその一部（住居址中央部分）を試掘調査のために攪乱しているが、四層に分層が可能である。住居址中央部に黒褐色土（10YR2/3）、暗褐色土（10YR3/3）がほぼ水平に堆積し、壁際には暗褐色土（10YR3/4）、住居址中央の床上に黄褐色土（10YR5/6）が堆積する。

遺物の出土状況　出土遺物は住居址全体に散在する形を採るが、その出土傾向を巨視的に見ると、住居址の中央部に集中することがわかる。これを層位で見ると２・３層内に偏在する傾向が認められ、４・５層内にはほとんど見ることができない。遺物に混在する形で礫も一緒に廃棄されたような状態で検出されている。礫は地山に含まれているようなもの、磨石等の石器、加熱を受け赤変し割れているもの等が認められた。

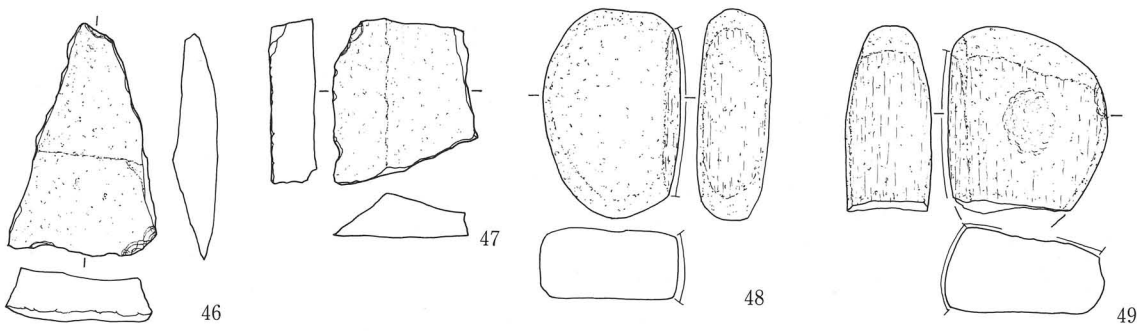
出土した縄文早期の土器片は、押型文群では市松文27、格子目文９、山形文１、楕円文２、その他では縄文８、撚糸文４、無文５、不明34を数え、押型文群の市松文が主体を占めることに特徴を持つ。石器では磨製石斧１、礫器Ⅰ類１、磨石Ⅲ類１、Ⅳ類１、黒耀石製石鏃１、石鏃ブランク１、スクレイパー１や、黒耀



第６図　第１号住居址（1/60）



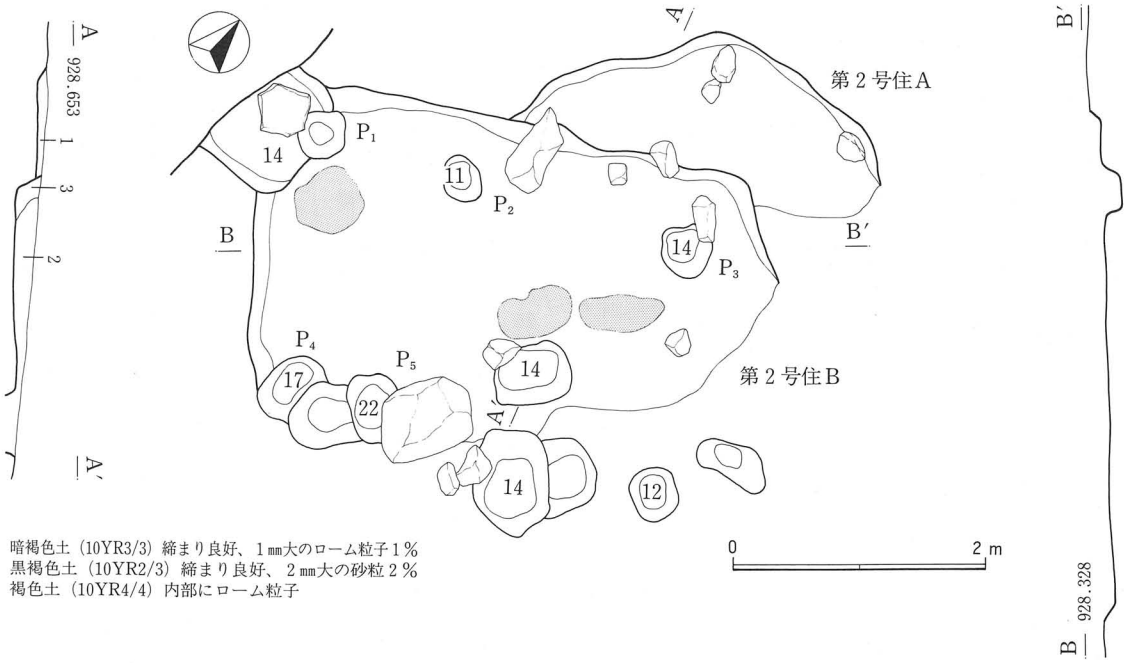
第７図　第１号住居址出土遺物（１～41・44は1/2、42・43は1/1、45は2/3）



第８図　第１号住居址出土遺物（46～49は1/4）

石砕片・剥片等総点数103（240.8ｇ）が得られている。石器組成は貧弱であるが、磨製石斧が含まれている点に注目したい。本址は検出された押型文土器より縄文時代早期前半立野式期に帰属すると思われる。

第２号Ａ住居址（第９・10図・図版２）



1　暗褐色土（10YR3/3）締まり良好、１㎜大のローム粒子１％
2　黒褐色土（10YR2/3）締まり良好、２㎜大の砂粒２％
3　褐色土（10YR4/4）内部にローム粒子

第９図　第２号住居址（1/60）

検出状況　本址は調査区の西側Ｃ－９グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地のやや西側に寄った位置に占地し、西側に第１号住居址が隣接し、南側には第２号Ｂ住居址が重複する。地形の関係や重複関係より南側のプランを把握することはできなかったが、検出し得た北・西側のプラン等よりほぼ住居址の平面形プランを推定することができた。

遺構の構造　基本的な平面プランは円形であるが、南側が第２号Ｂ住居址により切られ、また、地形の関係より南側の一部は流出し全体の約1/2は判然としないが、検出された北･西側の平面形プランより見るとやや南－北方向に長い不整円形のプランを想定することができようか。遺存している範囲が少ないために規模や長軸方向を計測することはできない。

壁の立上りは南側は地形の関係より流出して掘り方が低く不明瞭であったが、北、西、東側が明瞭である。壁は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で７㎝、西側で５㎝、東側で５㎝を測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは割合緩やかで断面形が皿状を呈し、床際が

丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

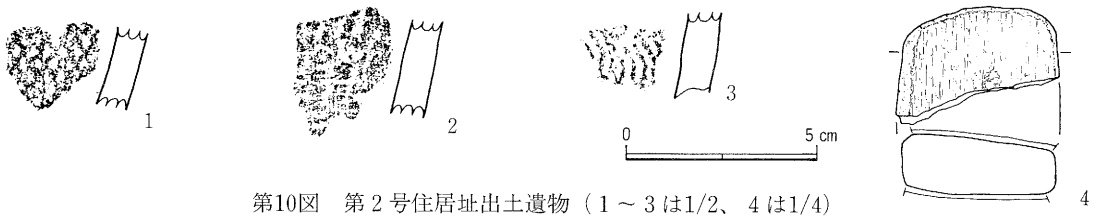
直接地山のローム面床としており軟質な部分は認められない。地山に含まれる礫が突出する部分が見られる。床面は敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することはできなかった。床面は中央部に向かいやや皿状の傾斜を持つ。

周溝や壁際を巡る小孔、柱穴、炉址は検出されていない。

覆土は割合締まりのある暗褐色土（10YR3/3）の単一層が堆積する。

遺物の出土状況　出土遺物は住居址全体に少量が散在する形を採る。その出土傾向を巨視的に見ると、住居址の中央部に集中する傾向となる。

縄文早期の土器片は、押型文群では市松文１、格子目文１、山形文１が出土している。石器では磨石Ⅱ類１、黒耀石砕片・剥片等総点数10（42.45ｇ）が得られている。石器組成は貧弱である。本址は検出された押型文土器より縄文時代早期前半立野式期に帰属すると思われる。



第10図　第２号住居址出土遺物（１～３は1/2、４は1/4）

第２号Ｂ住居址（第９図・図版２）

検出状況　本址は調査区の西側Ｃ－８・９グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地のやや西側に寄った位置に占地し、西側に第１号住居址が隣接し、北側には第２号Ａ住居址が重複する。地形の関係より南側、東側のプランを把握することはできなかったが、検出し得た北・西側のプラン等よりほぼ住居址の平面形プランを推定することができた。

遺構の構造　平面プランは隅丸長方形プランを呈するものと思われるが、地形の関係より南側が流出し全体形は判然としないが、検出された北・西側の平面形プランより見るとやや南西－北東方向に長軸を有する隅丸長方形のプランを想定することができよう。遺存している範囲が少ないために規模や長軸方向については推測の域であるが、長軸4.1ｍ×短軸2.9ｍを、主軸方向Ｎ－55°－Ｅを想定できようか。

壁の立上りは南側は地形の関係より流出して掘り方が低く不明瞭であったが、北、西、東側が明瞭である。壁は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で８㎝、西側で11㎝、東側で５㎝を測る。壁の掘り方は割合明瞭で直に近い立上りで、直線状である。

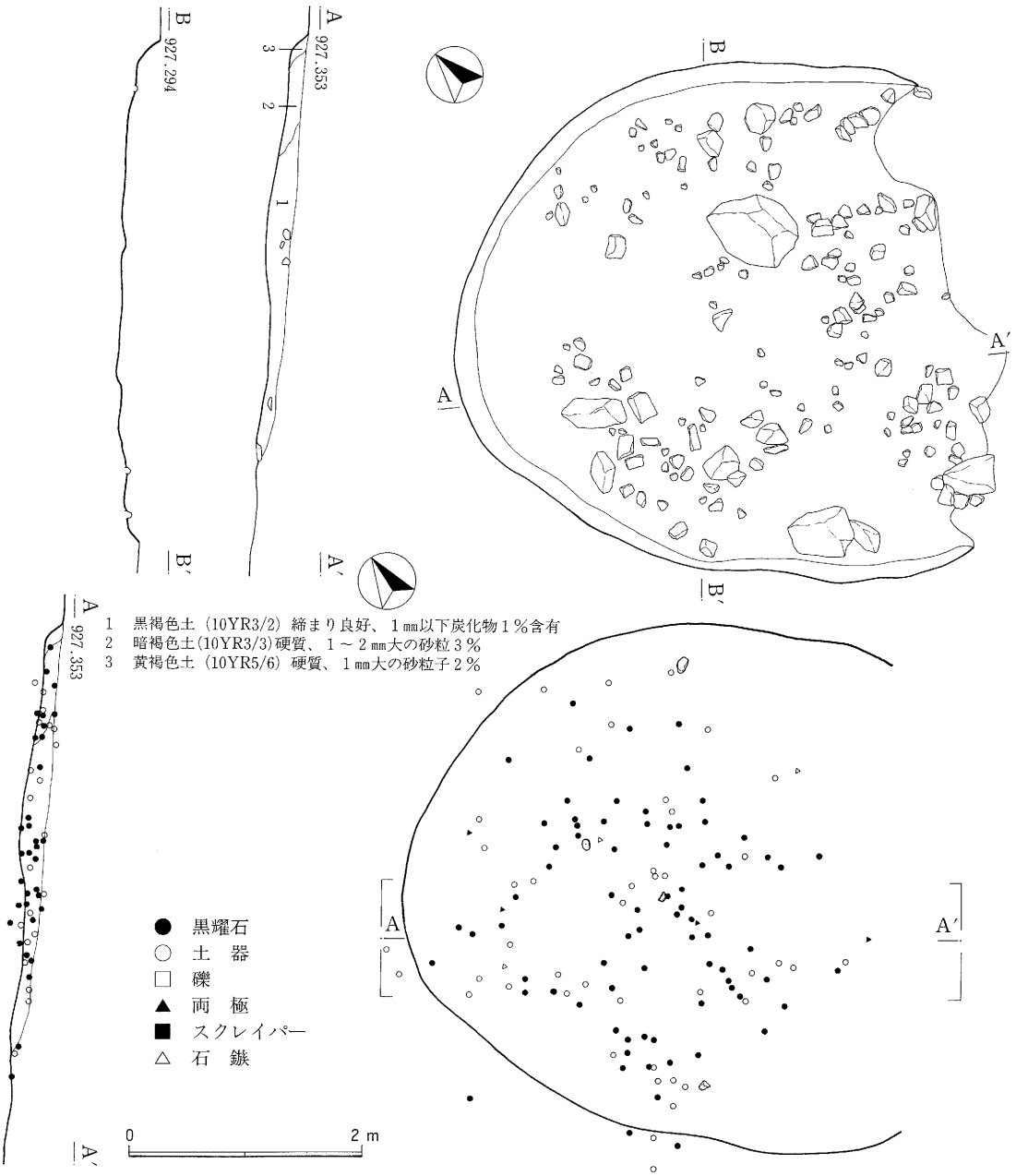
直接地山のローム面床としており軟質な部分は認められない。地山に含まれる礫が突出する部分が見られ、巨大な礫が北・南に露出する。床面は割合硬く、全体的に凹凸がある。床面は中央部に向かい微妙に皿状の傾斜を持つ。

周溝や壁際を巡る小孔は検出されてはいない。柱穴は北側、南側に認められ、P_1～P_6が主柱穴となるものと考えられる。炉址と思われる焼土範囲が東側の床面と西側壁際に検出された。焼土は不明瞭で強く焼けたような状態ではない。

覆土は壁際に褐色土（10YR4/4）が、中央部には黒褐色土（10YR2/3）が堆積する。

遺物の出土状況　出土遺物は少なく、石鏃１が検出されているに過ぎない。本址の時期を確定し得る資料は得られてはいないが、第２号Ａ住居址を切ることより縄文時代早期前半立野式期よりも新しい時期のものと考えられる。

第３号住居址（第11・12図・図版２）

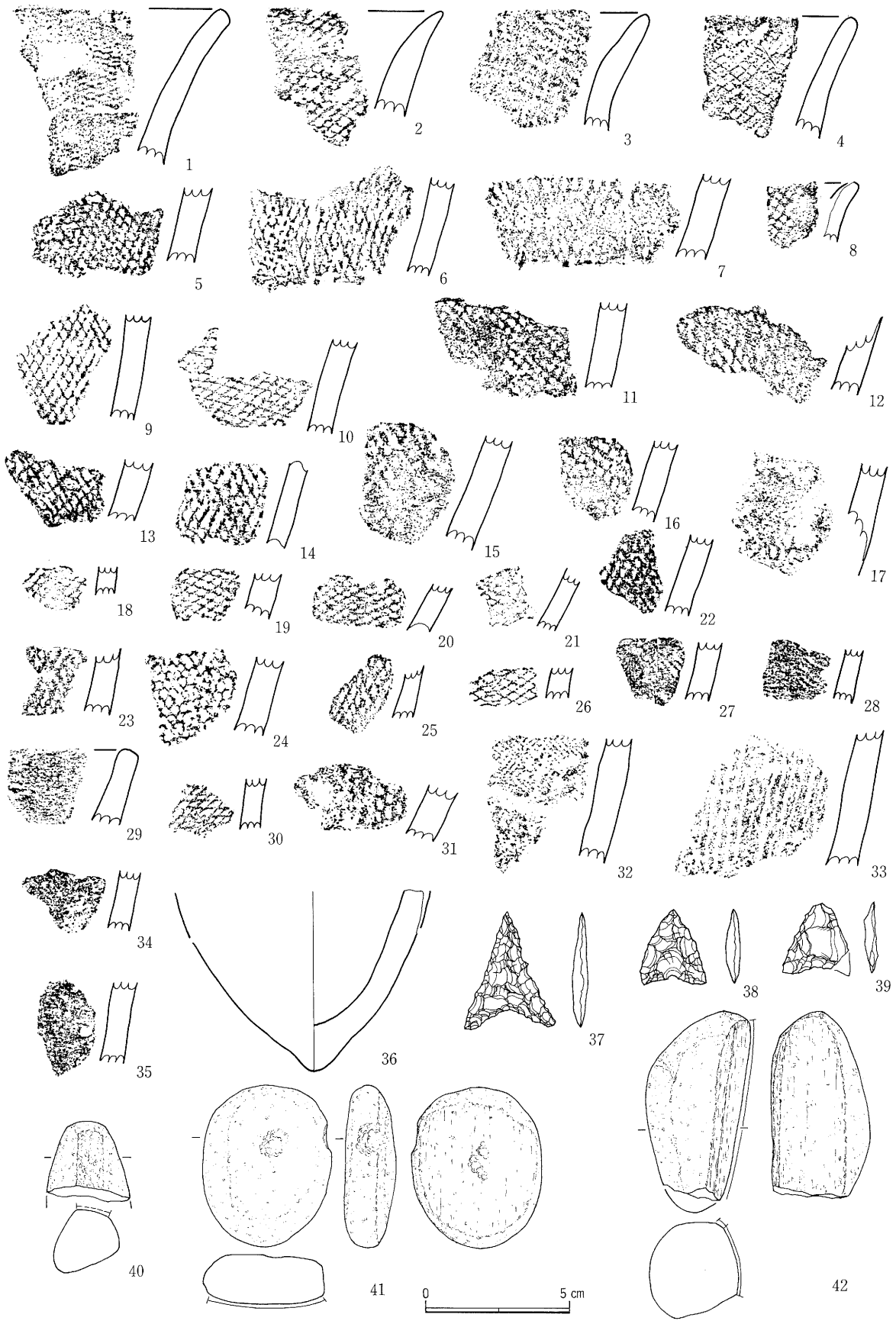


第11図　第３号住居址（1/60）

検出状況　本址の位置は調査区の西側Ｄ－８グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地の扇頂に近い位置に占地し、東側に第４号住居址と近接する。南側のプランは地形の関係より検出することができなかったが、明瞭な掘り方を有していた他の部分より住居址の全体を推定することができた。

遺構の構造　住居址の平面形プランは、やや南－北方向に長軸を持つ不整楕円形を呈する。検出できた範囲より住居址の規模を想定すると、長軸5.9ｍ×短軸4.4ｍのものが想定でき、規模的には一般的な住居址と言えようか。北方向に長軸を持ち長軸方向はＮ－46°－Ｗを示す。

壁の立上りは南側が地形の関係より流出しており、掘り方も全体的に低く不明瞭であった。北、西、東側について若干の壁の掘り方を確認することができた。壁は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で16cm、西側で８cm、東側で７cmを測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁



第12図　第３号住居址出土遺物（１～36は1/2、37～39は1/1、40～42は1/4）

の立上りは割合緩やかで断面形が皿状を呈し、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

直接地山のローム面床としており軟質な部分は認められない。地山に含まれる礫が突出が著しく、凹凸が多い。床面は敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することはできなかった。床面は中央部に向かい若干の皿状の傾斜を持つ。

周溝や壁際を巡る小孔、柱穴、炉址は検出されていない。

覆土は3層に分層が可能である。住居址中央部に黒褐色土（10YR2/2）、暗褐色土（10YR3/3）がほぼ水平に堆積し、壁際には黄褐色土（10YR5/6）が堆積する。

遺物の出土状況　出土遺物は住居址全体に散在する形を採るが、その出土傾向を巨視的に見ると、住居址の中央部に集中することがわかる。これを層位で見ると1・2層内に偏在する傾向が認められ、壁際に堆積する3層内にはほとんど見ることができない。土器尖底部が住居址西側範囲の床面付近より出土している。遺物に混在する形で礫も一緒に廃棄されたような状態で検出されている。礫は地山に含まれているようなもの、磨石等の石器、加熱を受け赤変し割れているもの等が認められた。

出土した縄文早期の土器片は、押型文群では格子目文33、山形文1、沢式1、その他では縄文2、撚糸文1、無文4、不明24を数え、押型文群の格子目文が主体を占めることに特徴を持つ。石器では凹石III類1、磨石III類2、黒耀石製石鏃2、石鏃ブランク1や、黒耀石砕片・剥片等総点数83（190.7g）が得られている。石器組成は貧弱で、凹石・磨石が主体となる特徴を持つ。本址は検出された押型文土器より縄文時代早期前半立野式期に帰属すると思われる。

第4号住居址（第13～18図・図版2・3）

検出状況　本址の位置は調査区の北西側E－8・9グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地の扇頂に近い位置に占地し、南西側に第3号住居址、北東側に9号住居址が隣接する。南側のプランは地形の関係よりやや不明瞭であった。東側が土坑に切られた形で重複する。

遺構の構造　住居址の平面形プランは東－西方向に長くつぶれる不整円形を呈している。規模は長軸7.38m×短軸6.57mで規模的には大型の住居址に属する。東西方向に長軸を持ち長軸方向はN－42°－Eを示す。

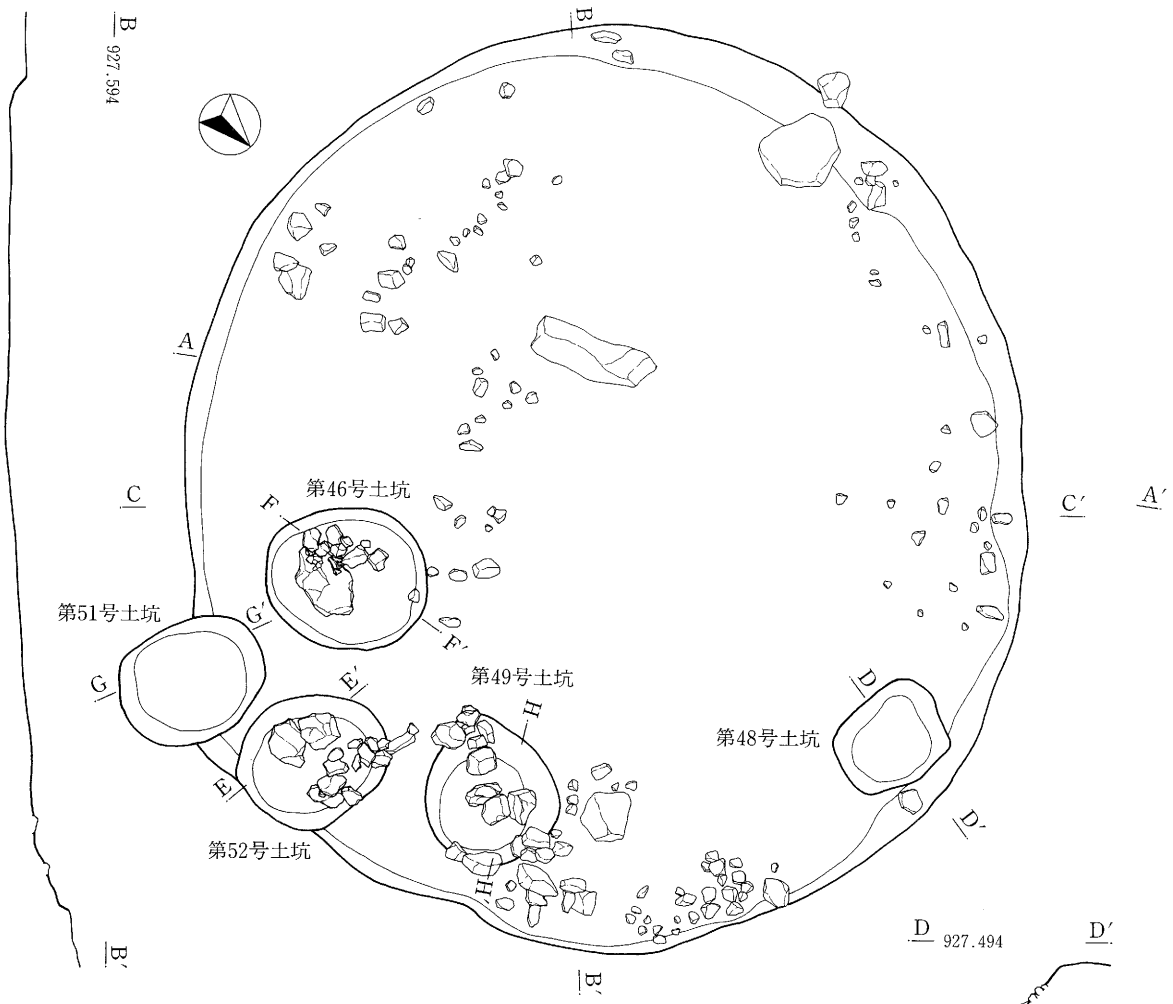
壁の立上りは南側は地形の関係より流出して掘り方が低く不明瞭であったが、北、西、東側が明瞭である。壁は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で23cm、西側で28cm、東側で14cm、不明瞭な南側で13cmを測る。壁の掘り方は明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは割合緩やかで断面形が皿状を呈し、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

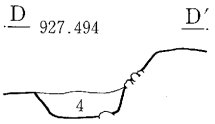
直接地山のローム面床としており軟質な部分は認められない。地山に含まれる礫が突出する部分が見られる。床面は敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することはできなかったが、床面直上がやや硬化する傾向が見られた。床面は中央部に向かい皿状の傾斜を持ち、中央部は浅い窪み状となる。

周溝や壁際を巡る小孔、柱穴、炉址は検出されていない。

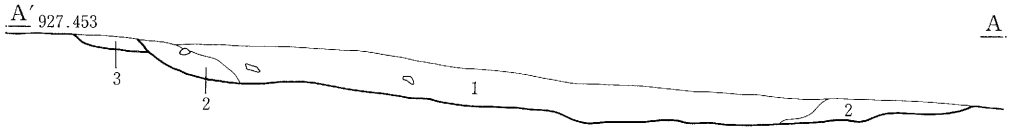
覆土は2層に分層できる。中央部に黒褐色土（10YR2/2）が、壁際に暗褐色土（10YR3/4）が堆積する。

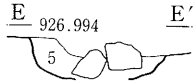
遺物の出土状況　本址は今回調査された住居址の中で最も出土遺物の多いものであった。出土遺物は住居址全体に散在する形を採るが、その出土傾向を巨視的に見ると、住居址の中央部に集中することがわかる。東側の土坑と重複する範囲には、遺物の分布が散漫で攪乱されたような状態を示している。遺物の出土層位を見ると1層内に偏在する傾向が認められるが、2層内にも若干ではあるが遺物を認めることができる。遺物に混在する形で礫も一緒に廃棄されたような状態で検出されている。礫は地山に含まれているようなもの、磨石等の石器、加熱を受け赤変し割れているもの等が認められた。

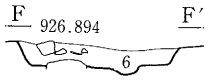


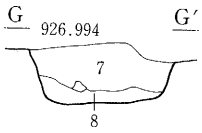


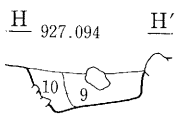
1　黒褐色土（10YR2/2）内部に１㎜大の砂粒５％
2　暗褐色土（10YR3/4）硬質、１～２㎜大の砂粒３％
3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）硬質、３～５㎜大の礫







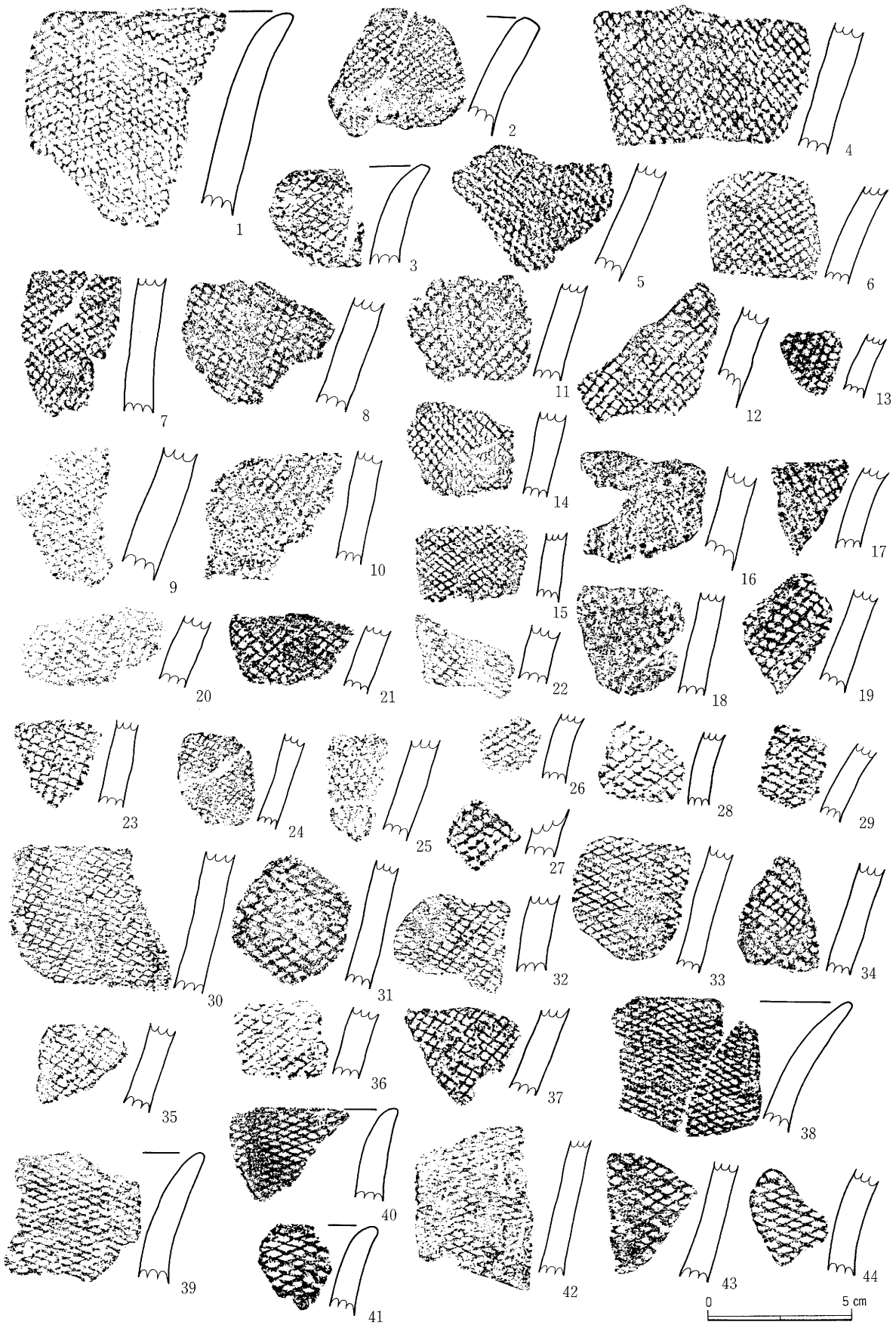




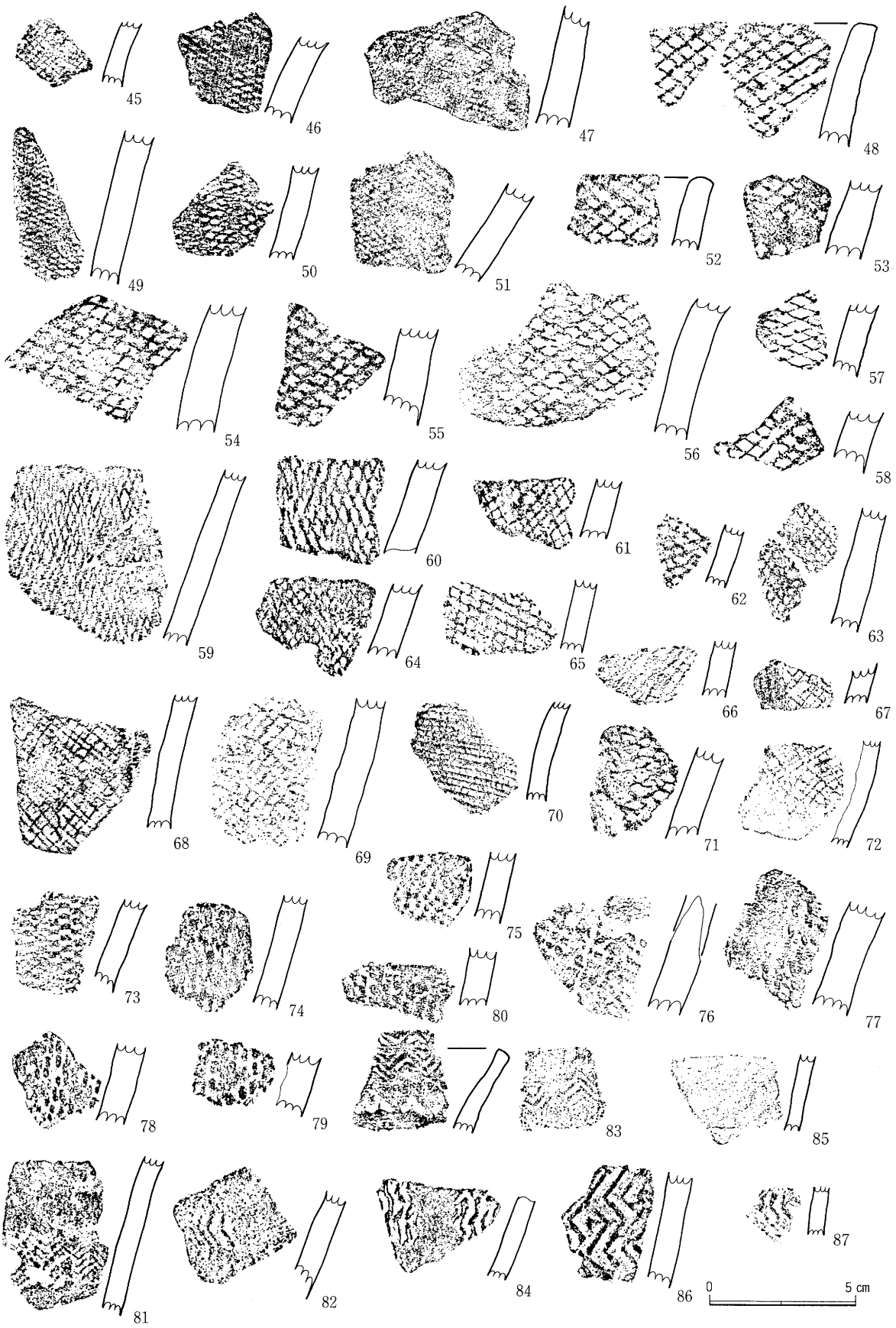
4　黒褐色土（10YR2/3）硬質、内部に２㎜大の砂状ローム３％含有
5　黒褐色土（10YR2/3）若干の締まり
6　黒褐色土（10YR2/3）若干の締まり、内部に１㎜大のローム２％含有
7　暗褐色土（10YR3/3）硬質
8　黒褐色土（10YR2/3）若干の締まり
9　黒褐色土（10YR2/2）若干の締まり、２㎜大のローム粒子
10　褐色土（10YR4/4）

0　2 m

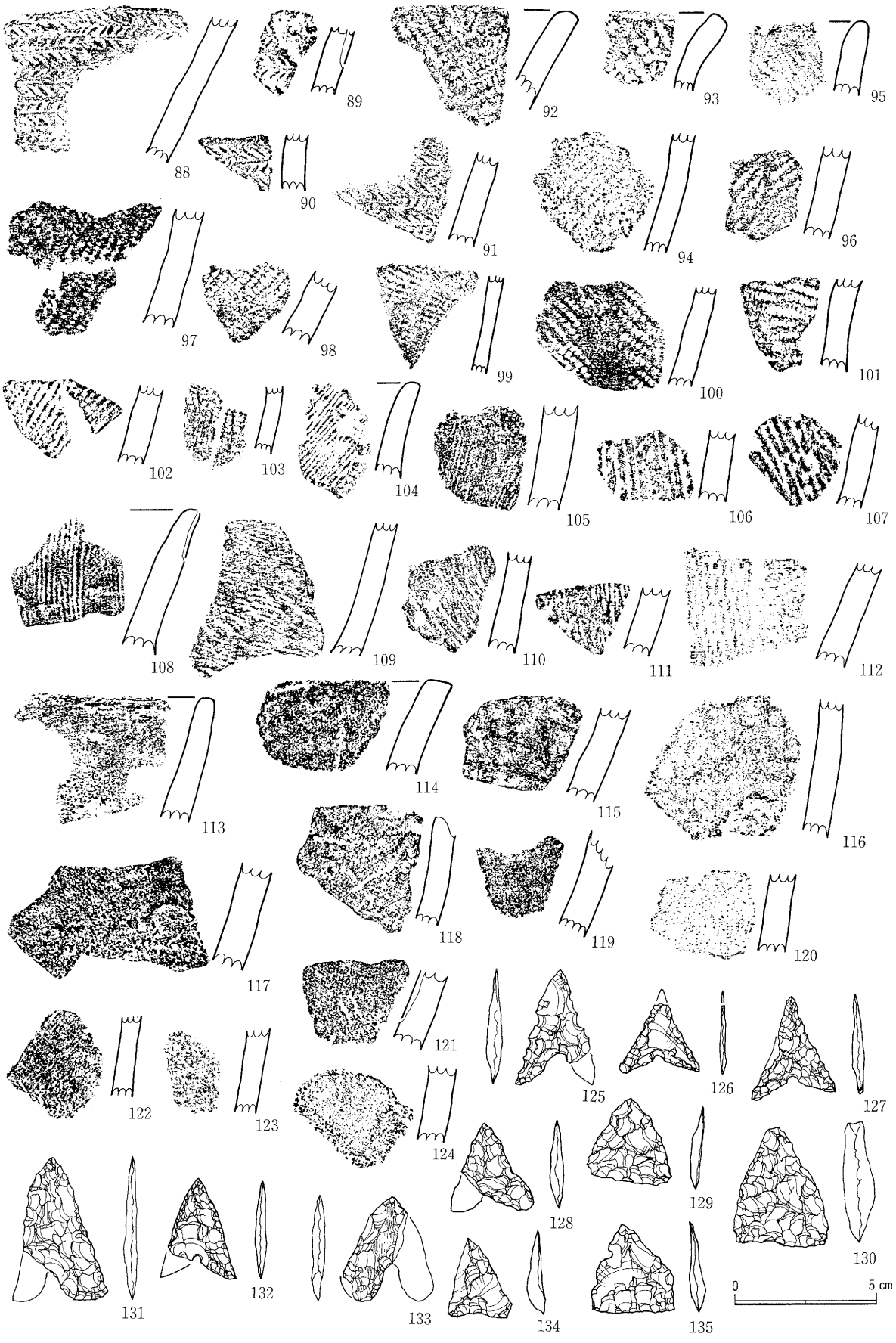
第13図　第４号住居址（1/60）



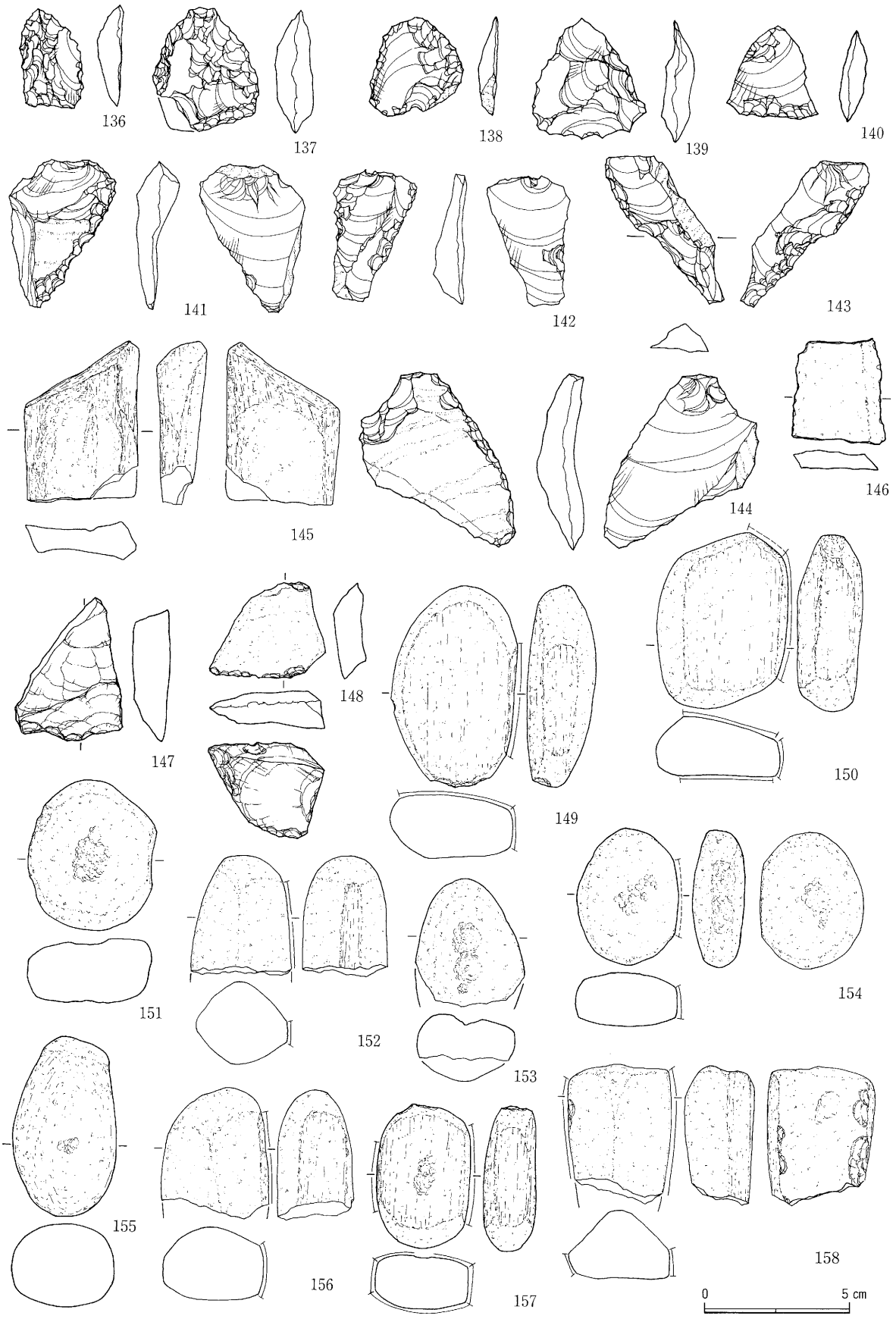
第14図　第４号住居址出土遺物（1/2）



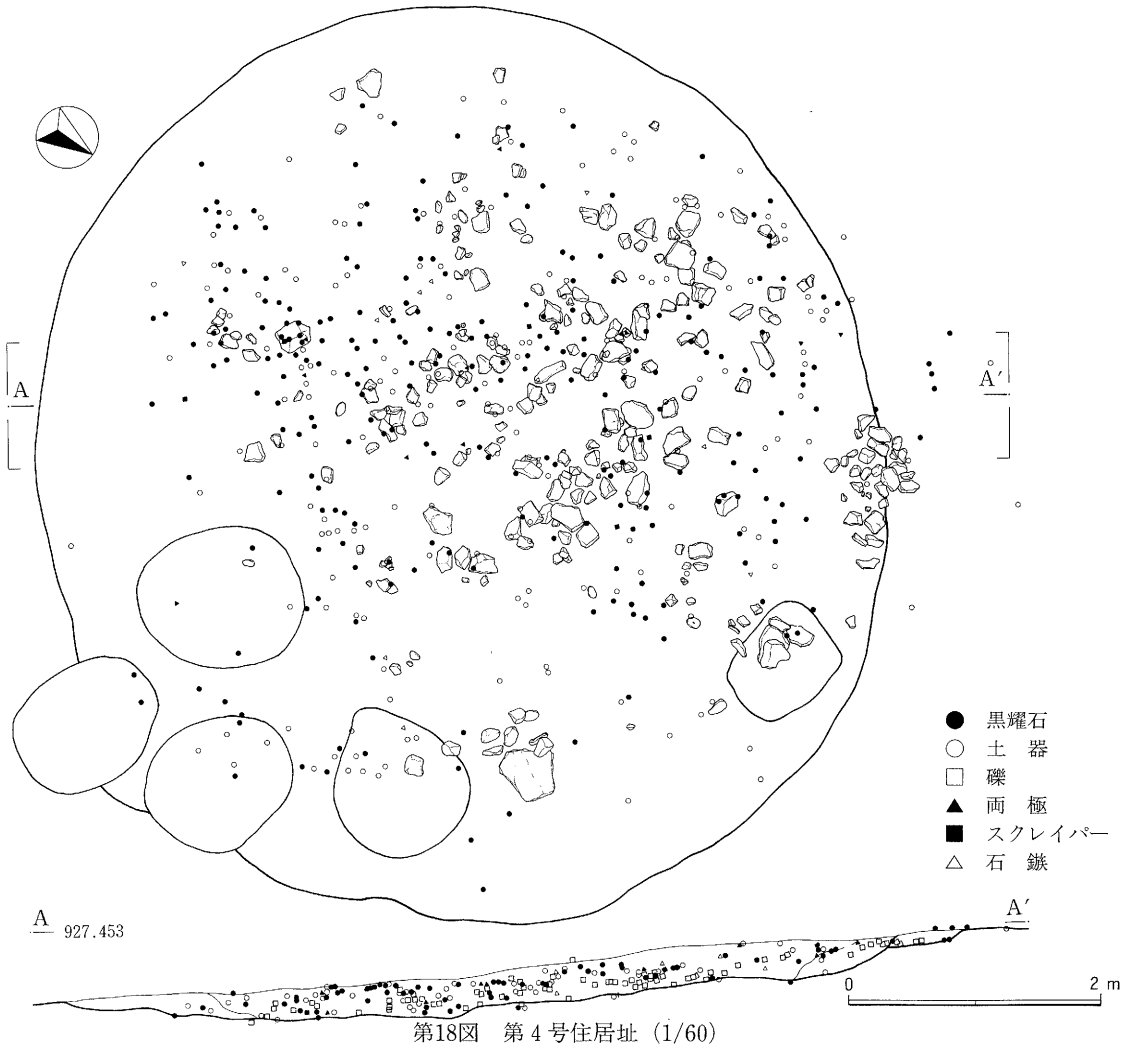
第15図　第４号住居址出土遺物（45～87は1/2）



第16図　第４号住居址出土遺物（88～124は1/2、125～135は1/1）



第17図　第４号住居址出土遺物（136～140は1/1、141～144は2/3、145は1/2、146～158は1/4）



第18図　第４号住居址（1/60）

出土した縄文早期の土器片は、押型文群では市松文３、格子目文109、山形文９、変形山形文３、楕円文６、沢式12、その他では縄文19、撚糸文13、無文49、不明51を数え、押型文群の格子目文が主体を占める。石器では横刃型石器１、礫器Ⅰ類２、凹石Ⅰ類１、Ⅱ類１、Ⅲ類１、磨石Ⅱ類１、Ⅲ類４、Ⅳ類２、砥石１、剝片１、黒耀石製石鏃16、石鏃ブランク９、スクレイパー５や、黒耀石砕片・剝片等総点数439（1752.55ｇ）が得られており、検出された縄文時代早期住居址の中で最も大量な石器群を有し、石器組成も充実している。本址は検出された押型文土器より縄文時代早期前半立野式期に帰属すると思われる。

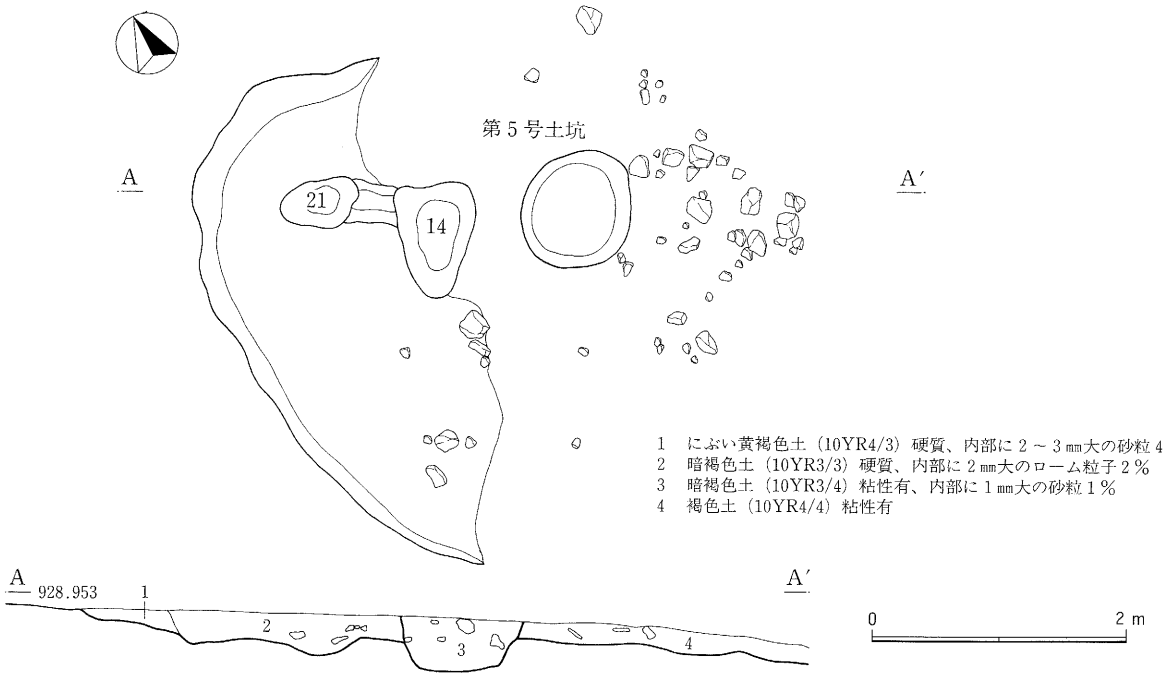
第５号住居址（第19・20図・図版３）

検出状況　本址は調査区の北西側Ｄ－10グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地のほぼ中央部より扇頂に寄った位置に占地している。住居址内には第５号土坑が重複する。地形の関係等より南・東側のプランを把握することはできず、全体の約1/2程度を確認したに過ぎない。

遺構の構造　住居址プランの一部が確認されただけであるために、住居址の全容を捉えることはできなかった。しかし、検出された北・西側の平面形プランより見るとやや南－北方向に長い不整円形のプランを想定することができようか。遺存している範囲が少ないために規模や長軸方向を計測することはできない。

壁の立上りは南・東側は地形の関係より流出して検出はなされていない。北、西側で検出された掘り方は緩やかな立上りを持ち、割合不明瞭な状態である。最も明瞭な北側で10㎝、西側で２㎝を測る。

直接地山のローム面床としており、地山の礫が突出していない部分では、割合平坦な硬質な床面となる。

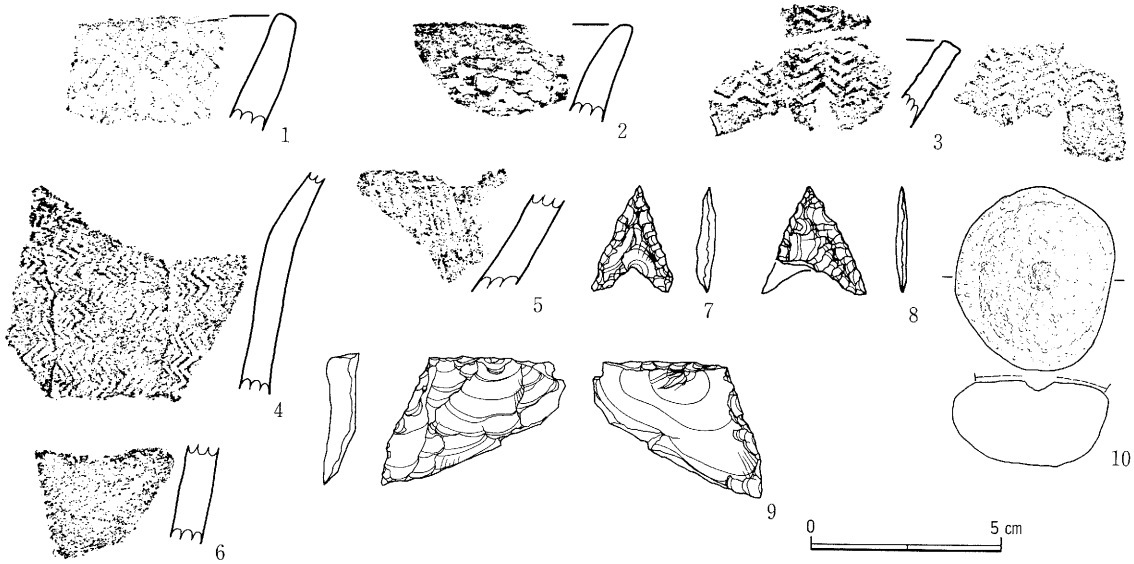


第19図　第５号住居址（1/60）

床面は地形に沿った形で若干の傾斜を持つ。

周溝や壁際を巡る小孔、柱穴、炉址は検出されていない。

住居址中央部に割合締まりのある暗褐色土（10YR3/3）、壁際にはにぶい黄褐色（10YR4/3）が堆積する。



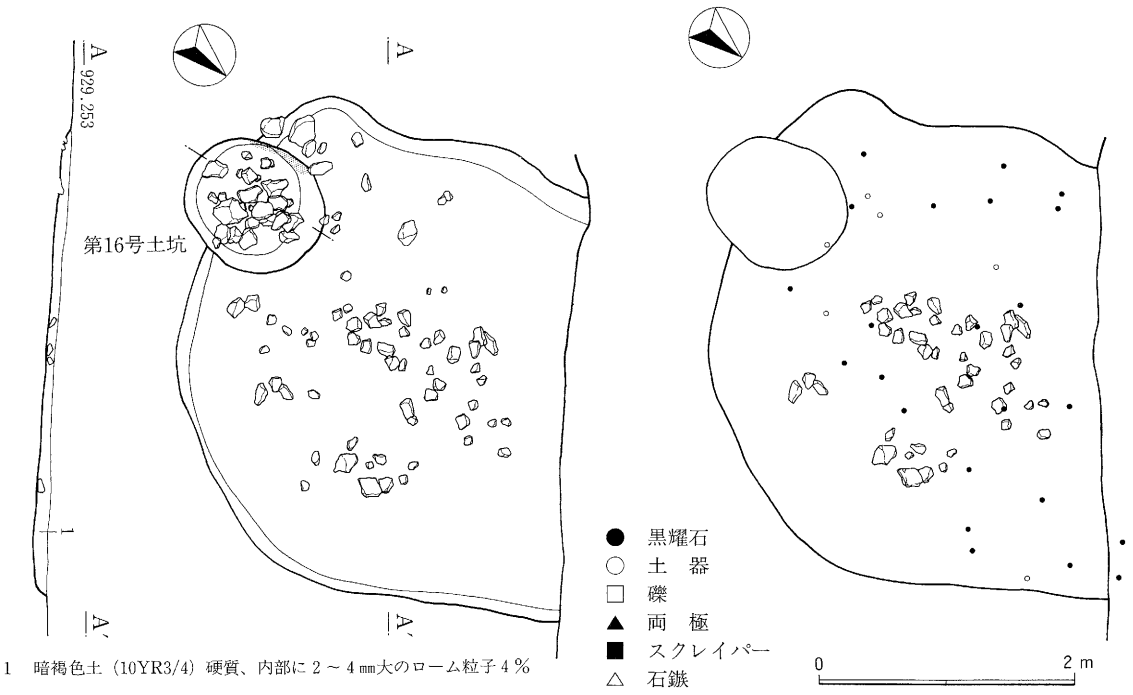
第20図　第５号住居址出土遺物（１～６は1/2、７・８は1/1、９は2/3、10は1/4）

遺物の出土状況　出土遺物は暗褐色土に集中する傾向が認められ、特に住居址の中央部に集中する。

縄文早期の土器片は、押型文群では市松文１、格子目文２、山形文２、沢式３、その他では撚糸文１、無文１、不明11を数える。石器では凹石Ⅰ類１、石鏃２や、黒耀石砕片・剝片等総点数38（143ｇ）が得られている。石器組成や出土土器は貧弱である。本址は検出された押型文土器より縄文時代早期前半立野式期に帰属すると思われる。

第６号住居址（第21・22図・図版３）

検出状況　調査区の北西側Ｄ－10グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地の扇頂に近い位置に



第21図　第2号住居址（1/60）

占地し、南側に第16号土坑と重複関係を持つ。北側のプランは調査区外に延びるために、住居址の全容を把握することができなかった。しかし、検出できた壁の掘り方は明瞭で容易に平面形を把握することができた。

遺構の構造　住居址の平面形プランは、やや東－西方向につぶれる不整楕円形を呈するものと考えられる。規模は確認できた範囲で、長軸3.4ｍ×短軸3.1ｍを測り規模的には一般的な住居址である。南北方向に長軸を持ち長軸方向はＮ－22°－Ｅを示す。

壁の立上りは南側は地形の関係より流出して掘り方が低く不明瞭であったが、西、東側が明瞭である。壁は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な西側で14cm、東側で16cm、不明瞭な南側で7㎝を測る。壁の掘り方は凹凸を呈し、壁の立上りは割合緩やかで断面形が皿状を呈し、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

直接地山のローム面床としており軟質な部分は認められない。地山に含まれる礫が突出する部分が見られる。床面は敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することはできなかった。床面は中央部に向かい皿状の傾斜を持つ。

周溝や壁際を巡る小孔、柱穴、炉址は検出されていない。

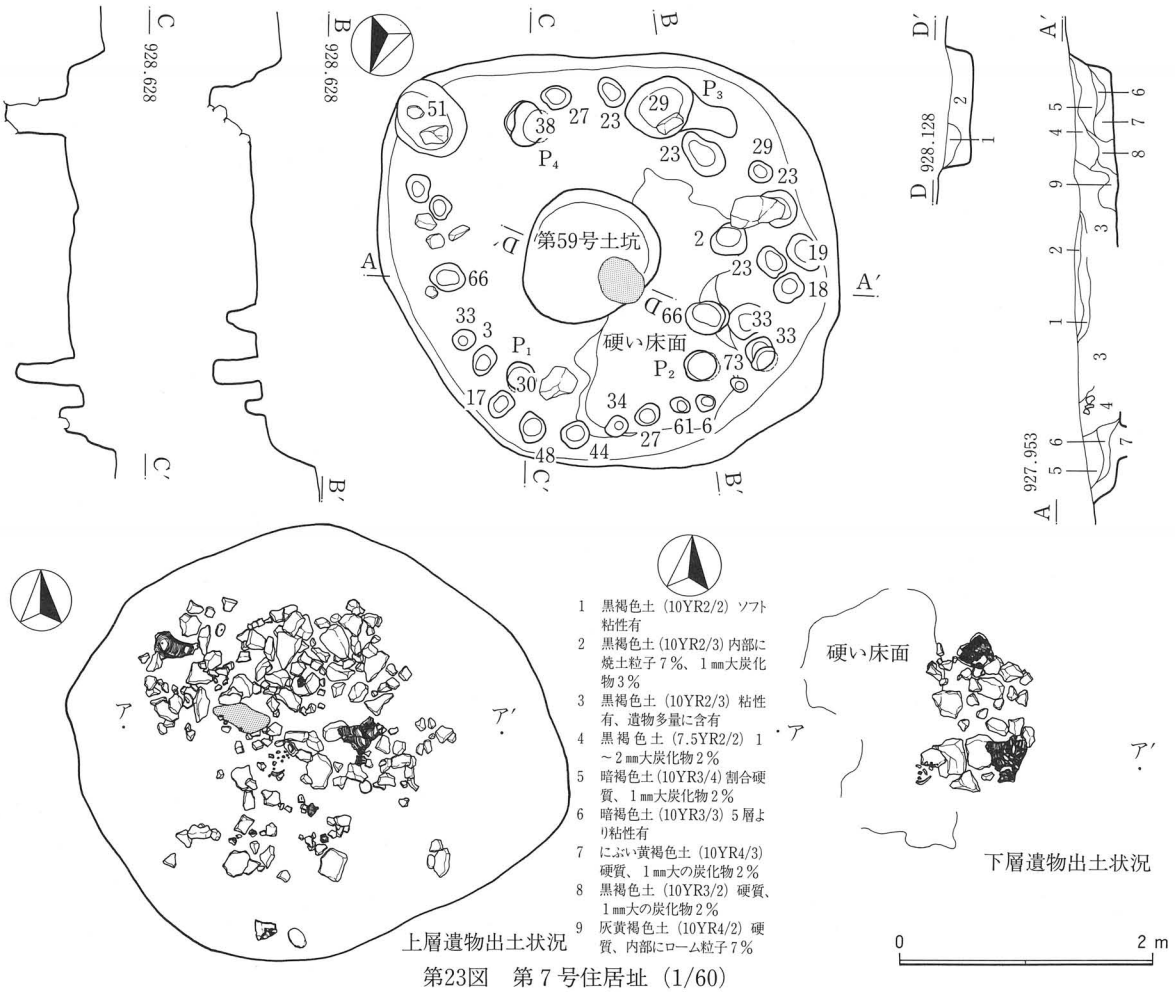
覆土は暗褐色土（10YR3/4）の単一層でほぼ水平に堆積している。

第22図　第6号住居址出土遺物（1～5は1/2）

遺物の出土状況　出土遺物は住居址全体に散在する形を採るが、その出土傾向を巨視的に見ると、住居址の中央部に集中することがわかる。遺物に混在する形で礫も一緒に廃棄されたような状態で検出されている。

出土した縄文早期の土器片は、押型文群では格子目文１、山形文３、沢式３、その他では縄文１、不明３を数える。石器では剥片１や、黒耀石砕片・剥片等総点数26（171.75ｇ）が得られている。石器組成は貧弱である。本址は検出された押型文土器より縄文時代早期前半立野式期に帰属すると思われる。

第７号住居址（第23図・図版４）



第23図　第７号住居址（1/60）

検出状況　本址は調査区の北側Ｅ－10グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地のやや東側に寄った位置に占地し、南東側に第８号住居址が隣接し、住居址中央部に第59号土坑と重複する。

遺構の構造　住居址の平面形プランは、やや北－南方向につぶれる不整円形を呈する。規模は長軸4.05ｍ×短軸3.5ｍを測りやや小型の住居址である。東西方向に長軸を持ち長軸方向はＮ－79°－Ｗを示す。

壁の立上りは南側は地形の関係より流出して掘り方が低い傾向となる。北、西、東側が明瞭である。壁は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で16㎝、西側で29㎝、東側で28㎝、南側で21㎝を測る。壁の掘り方は凹凸を呈し、壁の立上りは割合直線状で直に立ち上がる。

直接地山のローム面床としているが、地山に含まれる礫が突出する部分などは若干見られるだけである。北西床面は敲き締めたような硬化した土間状の床面となっている。床面は中央部に向かい皿状の傾斜を持つ。

周溝は検出されてはいないが、壁際には径20㎝前後の小孔が巡る。主柱穴は、径が24㎝、深さ35㎝前後の規模で、$P_1P_2P_4$は斜状となる。第59号土坑を埋めこの上面に41㎝×34㎝の不整円形の焼土範囲が検出された。この範囲が地床炉であろう。

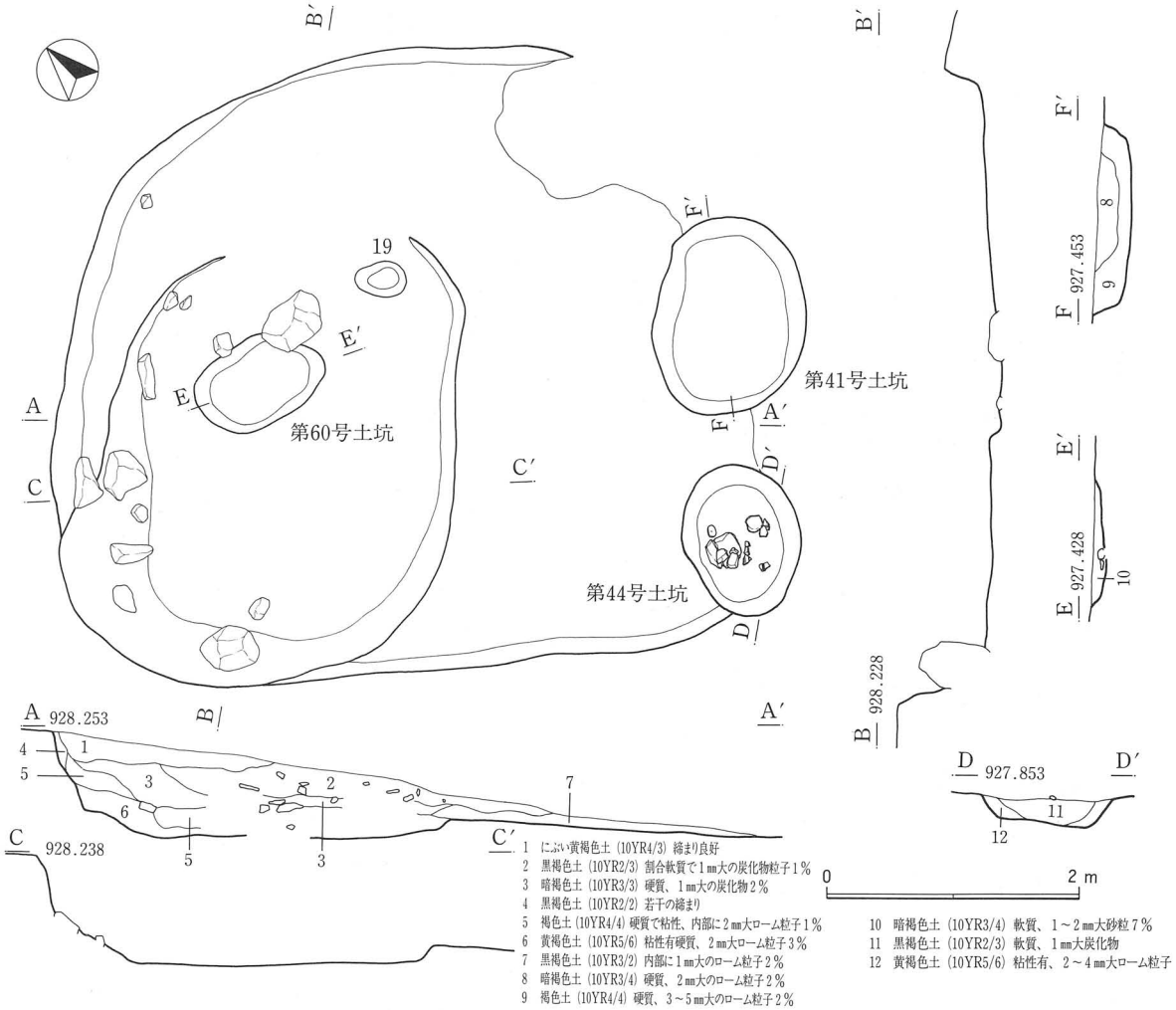
覆土は９層に分層でき、住居址中央部の窪みに礫や土器片が廃棄された状態を示す。遺物は床面よりやや

浮いた３層黒褐色土(10YR2/3)内から出土している。また、２層焼土を含む黒褐色土（10YR2/3）が住居址上面に堆積しており、これらの状態より推測すると自然堆積とは考えられず、埋め戻されたものかと思われる。

遺物の出土状況　出土遺物は住居址全体に散在する形を採るが、その出土傾向を巨視的に見ると、住居址の中央部に集中することがわかる。遺物に混在する形で礫も一緒に廃棄されたような状態で検出されている。礫は地山に含まれているようなもの、磨石等の石器、加熱を受け赤変し割れているもの等が認められた。

出土した縄文前期末の土器片は、総量11,675ｇを測り、石器では打製石斧８、横刃型石器４、凹石Ⅱ類３、磨石Ⅰ類１、Ⅱ類１、Ⅲ類１、剥片８、石鏃１、石鏃ブランク３、ドリル１、スクレイパー１や、黒耀石砕片・剥片等総点数110（813ｇ）が得られている。本址は土器より縄文時代前期末諸磯ｃ式期に帰属する。

第８号住居址（第24・25図・図版４）



第24図　第８号住居址（1/60）

検出状況　調査区の北西側Ｅ－10グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地の扇頂に近い位置に占地し、北側に第７号住居址と隣接する。また、住居址内に第41号・第44号・第60号土坑が重複する。

遺構の構造　住居址の平面形プランは、南－北方向に長軸方向を持つ不整楕円形を呈する。規模は確認できた範囲で、長軸5.62ｍ×短軸4.97ｍの割合大型の住居址と言えよう。長軸方向はＮ－47°－Ｗを示す。住居址内に入れ子状に小竪穴が重複している。この小竪穴は外側の大型住居址を切る形で構築され、小竪穴の規模は長軸3.7ｍ×短軸2.8ｍ、長軸方向はＮ－46°－Ｅを示し、大型住居址と軸線が直行する形を採る。

壁の立上りは南側は地形の関係より流出しており、北、西、東側が明瞭である。壁は地形が南側に傾斜を

持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で61cm、西側で22cm、東側で30cmを測る。壁の掘り方は凹凸を呈するが、立上りは直線状でしっかりしている。断面形は台形状を呈し、床際に丸みを有する。

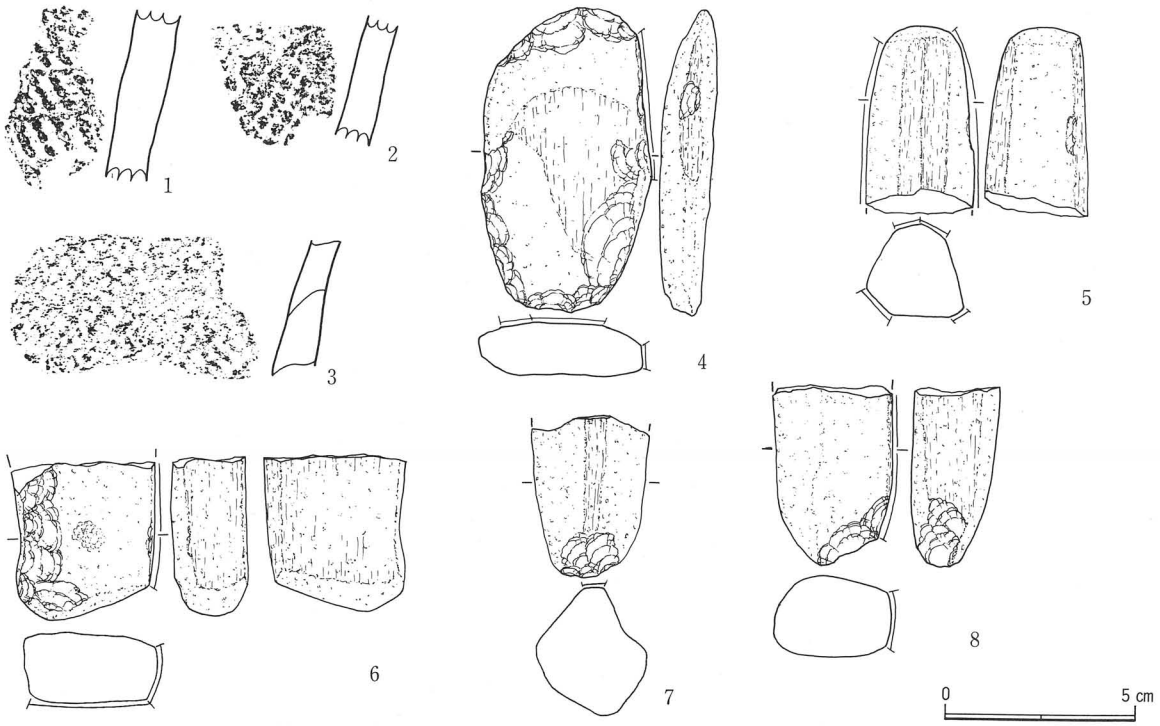
直接地山のローム面床としており軟質な部分は認められない。地山に含まれる礫が部分的に突出する。床面は敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することはできなかった。床面は中央部に向かいやや皿状の傾斜を持つ。

周溝や壁際を巡る小孔、柱穴、炉址は検出されていない。

覆土は７層に分層される。４～７層が堆積後大きく窪んだ部分に礫や縄文前期末の土器片を含む２・３層が堆積していることが観察できた。

遺物の出土状況　出土遺物は２・３層より礫と混在した形で縄文前期末の遺物が出土しているが、住居址床面上に堆積する５・６・７層内からは縄文早期押型文土器片が得られている。

出土した縄文早期の土器片は、押型文群では楕円文２、沢式３、その他では縄文１を数える。石器では磨石Ⅰ類１、Ⅲ類３、Ⅳ類１や、黒耀石砕片・剥片等総点数22（140.2ｇ）が得られている。本址は検出された押型文土器より縄文時代早期前半立野式期に帰属すると思われる。



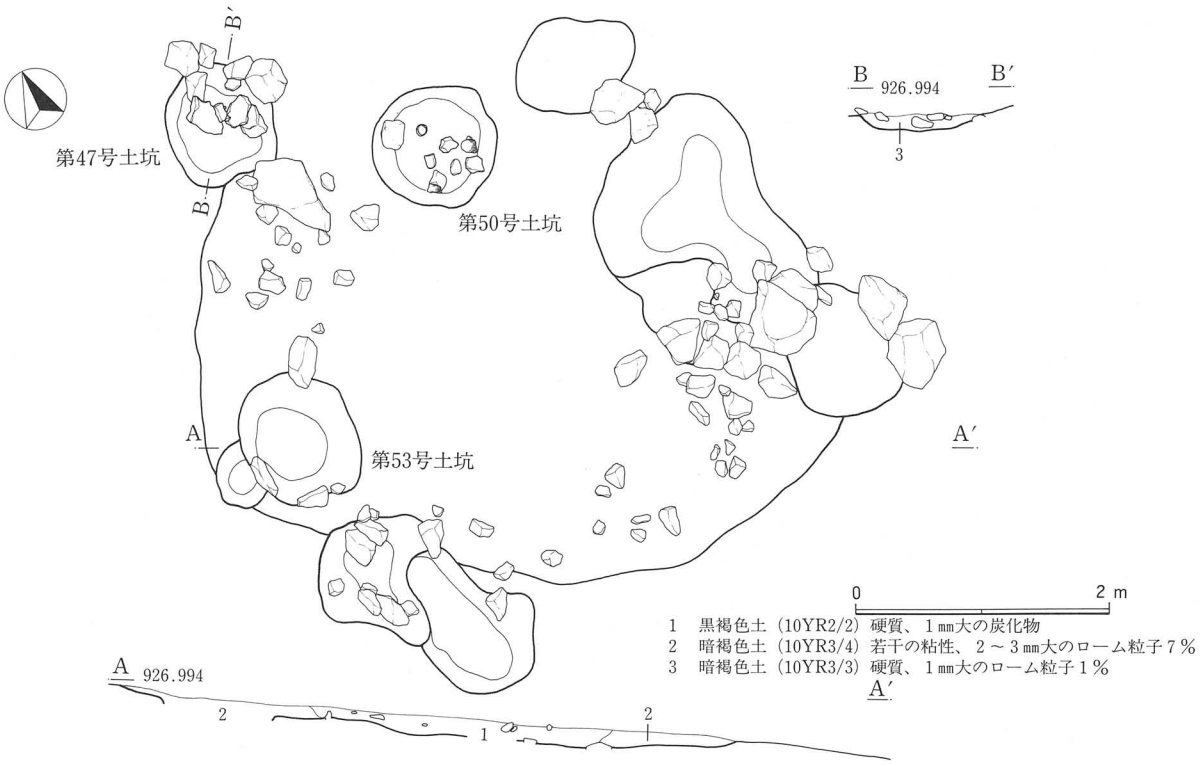
第25図　第８号住居址出土遺物（１～３は1/2、４～８は1/4）

第９号住居址（第26・27図・図版４）

検出状況　本址は調査区の中央よりやや東側に寄ったＦ－９グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地のやや東側に寄った位置に占地し、北側に第13号住居址が隣接し、第47号・第50号・第53号土坑が重複し、東西隅側が石の抜取り作業により攪乱されている。地形の関係や住居址の掘り方が不明瞭なこともあり、全体のプランを把握することはできず、北・西側の壁掘り方の一部を検出し得たに過ぎない。

遺構の構造　平面プランは不明な部分が多いが、検出し得た掘り方部より推定すると、南北方向にやや長めの不整円形を呈するものと思われる。遺存している範囲が少ないために規模や長軸方向については推測の域であるが、長軸5.1ｍ×短軸4.3ｍ、主軸方向Ｎ－60°－Ｗを想定できようか。

壁の立上りは不明瞭で明確な立上りを検出することはできなかった。壁の掘り方は皿状で住居址中央部に

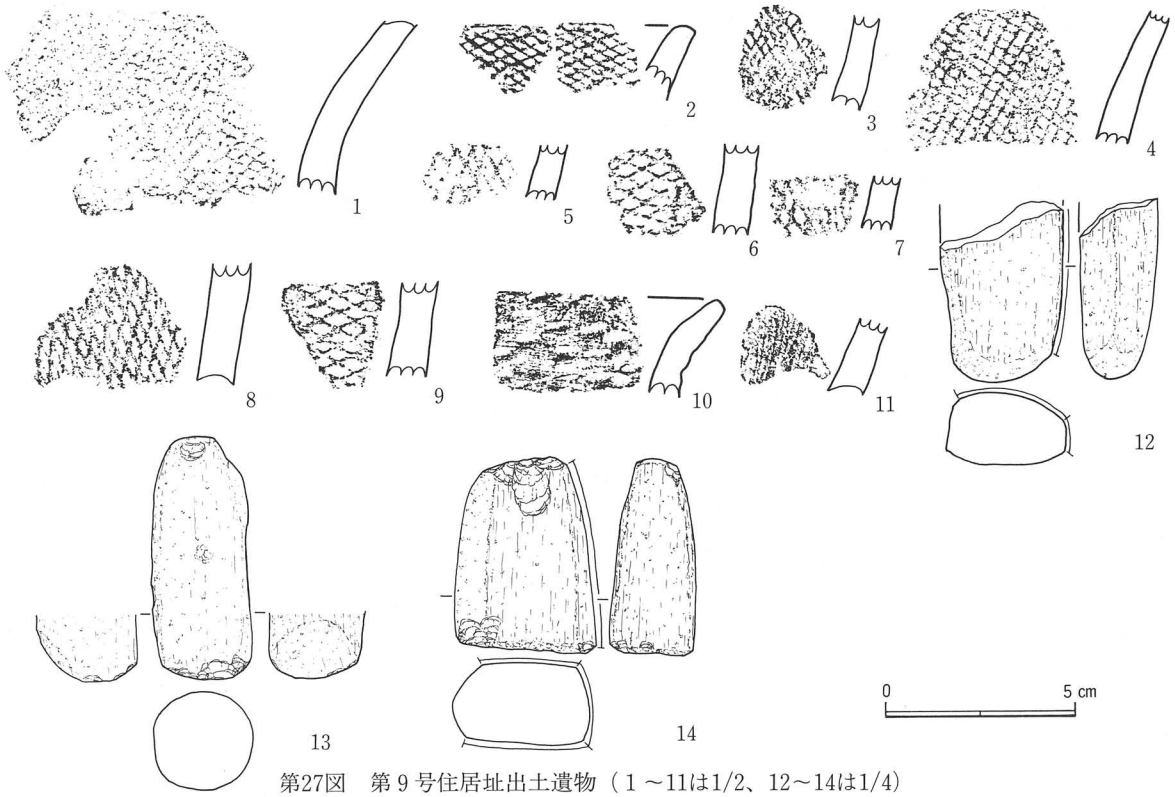


第26図　第9号住居址（1/60）

向かって緩やかな傾斜を有している。

直接地山のローム面床としており軟質な部分は認められないが、地山に含まれる礫が突出し、かなり凹凸が激しく、部分的に巨大な礫が露出する。床面は中央部に向かい微妙に皿状の傾斜を持つ。

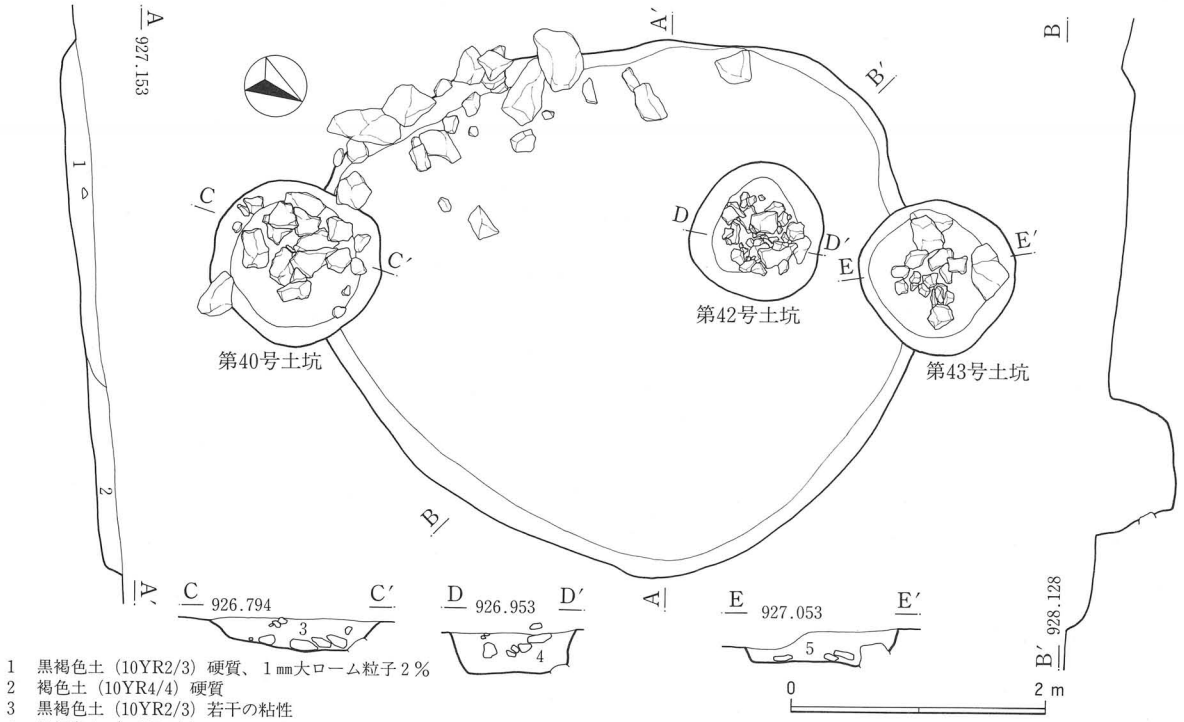
周溝や壁際を巡る小孔、柱穴、炉址は検出されていない。



第27図　第9号住居址出土遺物（1～11は1/2、12～14は1/4）

遺物の出土状況　遺物は住居址中央部に堆積する１層内に集中する傾向が認められた。石鏃１が検出され出土した縄文早期の土器片は、押型文群では格子目文15、市松文１、その他では撚糸文３、無文３、不明３を数える。石器では凹石Ⅱ類１、磨石Ⅱ類１、Ⅳ類２、剥片４や、黒耀石砕片・剥片等総点数47（407ｇ）が得られている。本址は検出された押型文土器より縄文時代早期前半立野式期に帰属すると思われる。

第10号住居址（第28図・図版５）



1　黒褐色土（10YR2/3）硬質、１㎜大ローム粒子２％
2　褐色土（10YR4/4）硬質
3　黒褐色土（10YR2/3）若干の粘性
4　黒褐色土（10YR2/3）２～３㎜大のローム粒子５％
5　黒褐色土（10YR2/3）１～２㎜大の炭化物１％

第28図　第10号住居址（１／60）

検出状況　本址は調査区の東側Ｆ－10グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地が東側に広がる斜面部に占地し、北西側に第８号住居址と近接し、第40号・第42号・第43号土坑と重複関係を持つ。

遺構の構造　住居址の平面形プランは、やや南－北方向に長軸を持つ不整円形を呈し、長軸4.73ｍ×短軸4.28ｍを測り、一般的な規模の住居址と言えよう。長軸方向はＮ－19°－Ｗを示す。

壁の立上りは南壁が地山礫層を掘り込み、全体的に低く不明瞭であった。北、西、東側について若干の壁の掘り方を確認することができた。壁は地形が南側に傾斜を持つため南側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で19㎝、西側で12㎝、東側で12㎝、南側で12㎝を測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは割合緩やかで断面形が皿状を呈し、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

直接地山のローム面床としており軟質な部分は認められない。地山に含まれる礫が突出し、凹凸が認められる。敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することはできなかった。床面は中央部に向かい若干の皿状の傾斜を持つ。

周溝や壁際を巡る小孔、柱穴、炉址は検出されていない。

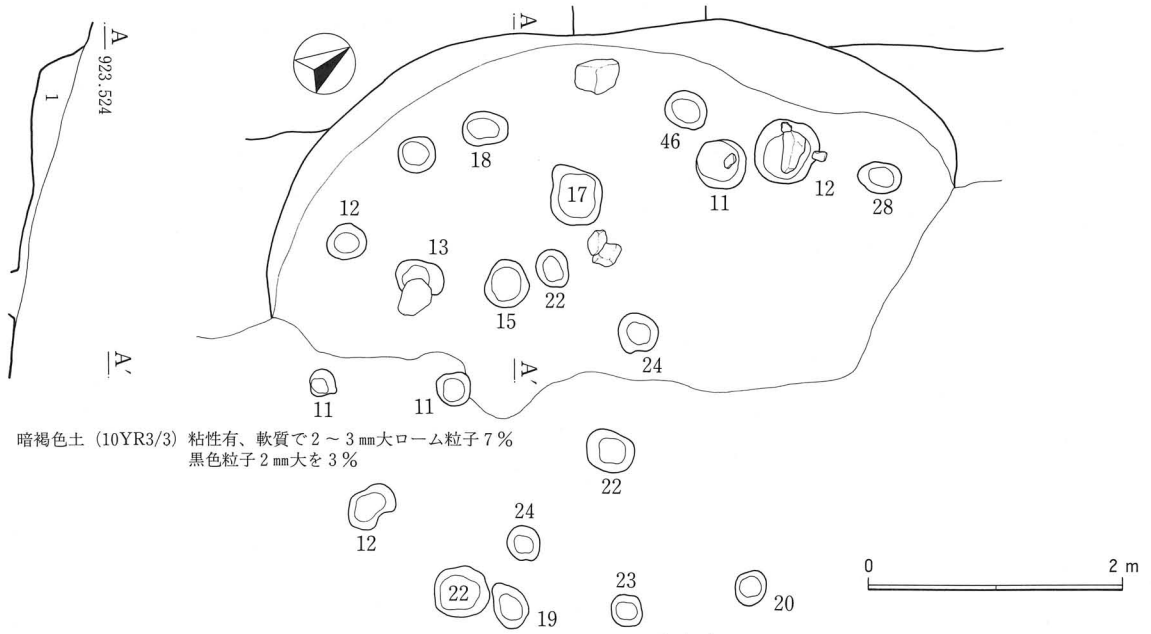
覆土は２層に分層が可能である。住居址中央部に黒褐色土（10YR2/3）、褐色土（10YR4/4）が堆積する。

遺物の出土状況　出土遺物は少量で住居址内に散在する傾向を示す。

土器片の出土はなく石器では磨石Ⅳ類１、黒耀石砕片・剥片等総点数３（12ｇ）が得られている。本址の時期を示すような資料は得られてはいないが、住居址の構造等より縄文時代早期前半に帰属するものと思わ

れる。

第14号住居址（第29・30図・図版５）



1　暗褐色土（10YR3/3）粘性有、軟質で２～３㎜大ローム粒子７％
　　黒色粒子２㎜大を３％

第29図　第14号住居址（1/60）

検出状況　本址は調査区の東側Ⅰ－７グリッドで確認されたものである。住居址は扇状地の扇端部に近い位置に占地する。南・東側のプランは地形の関係より流出しており確認できなかった。北側の壁際に近代の石の抜取り坑が重複する。

遺構の構造　住居址の約1/2が畑地の造成に伴い削平されており全体像を把握することができなかったが、確認された北・西壁より推定すると、ややつぶれる不整円形の平面プランを想定できよう。

壁の立上りは南側は地形の関係や畑地造成により削平されており確認できなかったが、北、西側が明瞭である。最も明瞭な北側で46cm、西側で40cmを測る。壁の掘り方は明瞭でやや凹凸を呈する。壁の立上りは直に近く床面際が丸みを持つ。

直接地山のローム面床としており軟質な部分は認められない。敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することはできなかった。床面は中央部に向かい皿状の傾斜を持つ。

壁際に柱穴状の掘り方が巡っているが、浅く位置に規則性が少ない点より主柱穴とは考えにくく、また、中央部にも数ヶ所の柱穴が認められるが、この柱穴も主柱穴とは考えられない。周溝や炉址は検出されていない。

第30図　第14号住居址出土遺物（１～３は1/2）

遺物の出土状況　出土遺物は少量で、出土遺物は住居址全体に散在する形を採る。

出土した縄文早期の土器片は、押型文群では格子目文１、沢式１、無文２が出土している。石器では石鏃１、黒耀石砕片・剝片等総点数12（48.9ｇ）が得られている。本址は検出された押型文土器より縄文時代早期前半立野式期に帰属すると思われる。

2．土　坑

土坑は地表面に掘り込まれた「穴」を指し、所謂土壙や小竪穴、木の根による攪乱孔等を全て総称しており人為・自然を問わず遺構確認の段階において確認面下に掘り込みが確認できた「穴」全てについて番号を付し土坑として取扱った。本来ならば「穴」の意味合いに応じてその名称も落し穴や墓壙、貯蔵穴等に区分して所見・報告しなければならないと考えられるが、今回得られたデータからはこれらを明瞭に区分するだけの情報を得ることはできなかった。土坑とピットの区分については規模に依るところが大きい。

土　坑（第31・32・33図、図版６）

今回の調査において多くの土坑が検出され、番号を付したもので60を数えるが内２は遺構掘り下げの段階で消去したもの等も含まれている。これらの内の約60％から遺物が検出されているが、土器小片が大半を占め時期を明確にすることができなかった。形状的に分類すると明らかに相違のあるグループが存在し、土坑と大きな一群として括られるものではなく、多種多様な坑のグループとして取り扱いたい。

土坑の分類　土坑を分類する際に大きな基準となるものは、坑の規模や構造（掘り方等）に依るところが大きい。なお、規模特に上面形や深さの細かな数値については検出面の状況により異なりがあり、そのため概略的なまとめ方が適当であると思われる。

また、規模や構造の要件に土層の堆積状態や遺物の出土状況が加わる。特に坑の掘り方は土坑の役割に大きな影響を持っていたものと考えられ、細かな観察を必要とする要件である。これらの事柄を踏まえて代表的な群の土坑を図示し記述する。

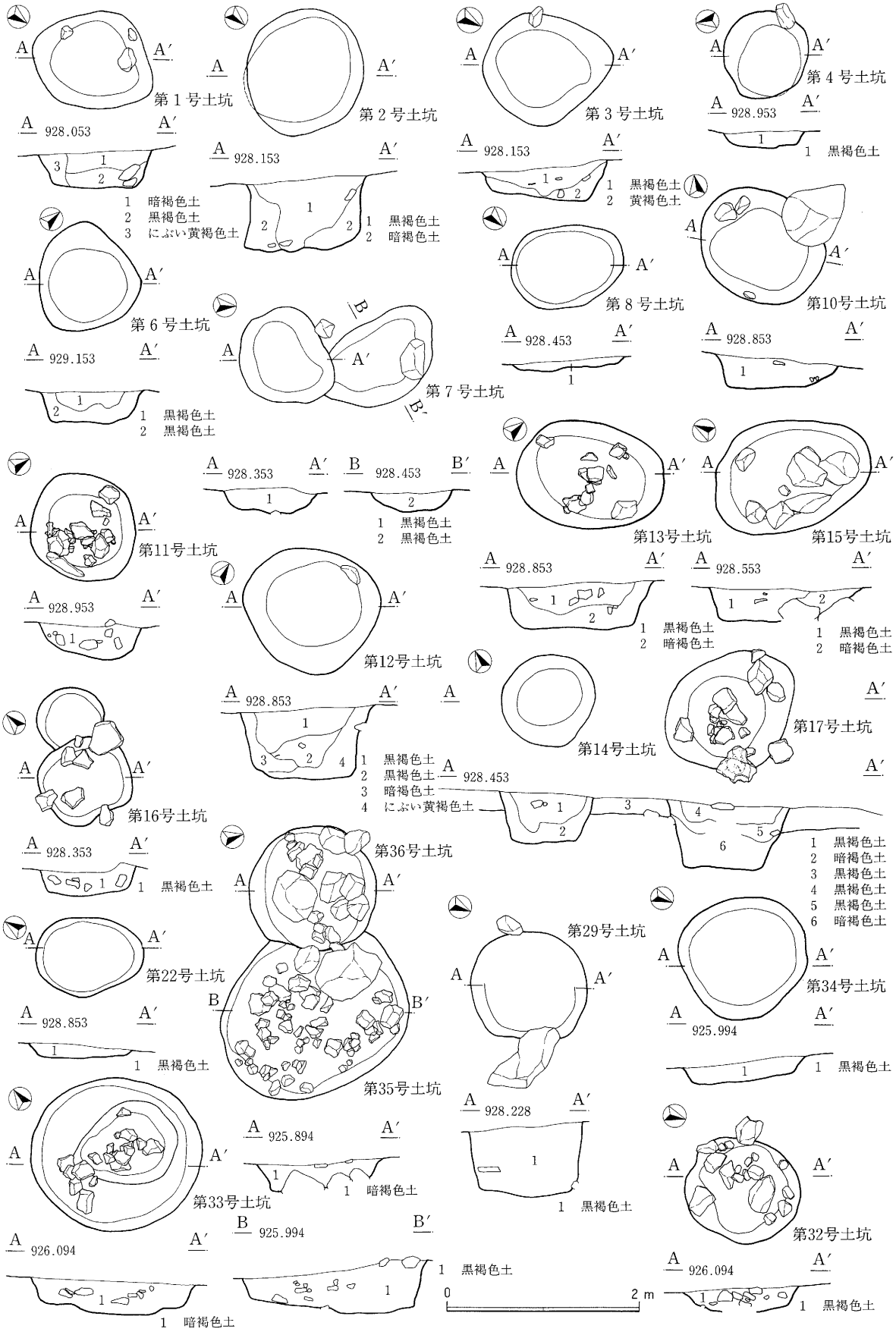
第Ⅰ群　平面プランが円形を基本とする土坑群で、断面形等により５類に分類が可能である。本群の土層堆積状態を大きく分類すると、①ロームブロック等を含む黄褐色土などにより埋め戻されたような土層状況を示すもの、②土層が分層できない単一層のもの、③壁際に崩落したような状況を示す所謂三角堆土を持つもの、④上半部がレンズ状堆積で、下半部は水平堆積を示し、ロームブロック等のローム系埋土が堆積するものがある。

第Ⅰ群Ⅰ類（２・55・57）　断面形が所謂巾着型・フラスコ型を呈する土坑で、構造的にはしっかりした掘り方、深さを有する。本群の土層状況は基本的には数層に分層される。特に壁際に壁が崩落して形成されたと思われる土層が堆積しており、自然堆積を思わせる状況のもの①②③が認められる。第57号土坑のように人為的に土坑内に土器廃棄したような状況の遺物の出土状態を示すものもある。

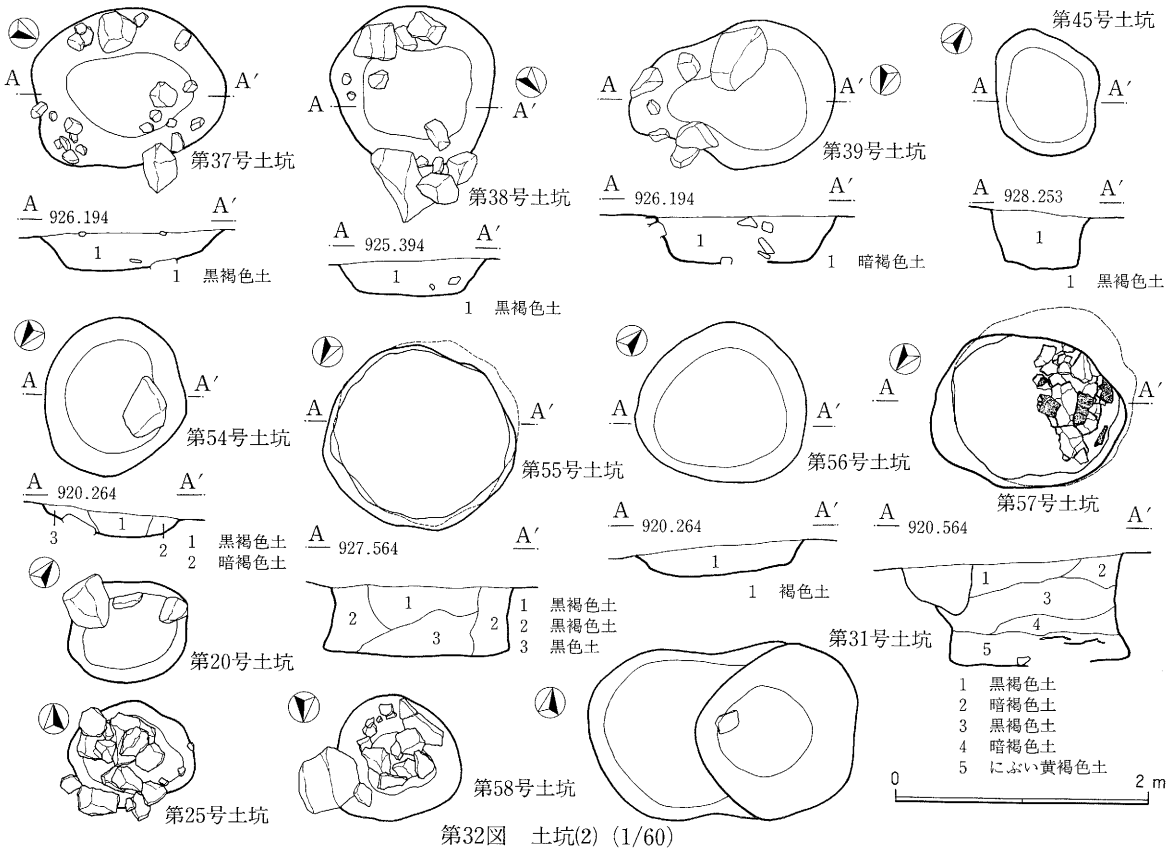
第Ⅰ群２類（12・29）　断面形が樽状を呈する土坑で、１類と同様にしっかりした掘り方、深さを有する。土層の堆積状況は②③が認められる。

第Ⅰ群３類（１・３～11・13～28・31～54・56・58～60）　１類のような深さを有する土坑ではなく、断面形が盥状を呈する。平面プランもやや不正形なものが含まれる。断面は坑底と壁際が明瞭とならず丸みを持つもの、ダラダラと立ち上がるものなどが見られる。坑底も凹凸を示し、その状況も軟弱な傾向を示すものが含まれる。土層堆積は③が中心となる。平面プラン、坑の構築方法を見た場合１類などと比較すると貧弱な傾向を示す。

土坑の遺物の出土状況と土坑の時期について　土坑の埋土より遺物を出土する例は本遺跡においては、全体の約60％を占める。殆どの土坑は土器小片しか出土してはいない。遺物が検出されたものを観察すると、土器が人為的に埋置されたりする例は第57号土坑だけで、この場合縄文早期末深鉢９個体以上の破片を一括に廃棄していた。この土坑以外では何れも一括性のないものであり、土層の堆積状況から自然堆積した際に土器等が流入した状況を示しており、人為的に埋納・埋設したような遺物出土状態の土坑は検出されてはい


第1号土坑
A 928.053 A′
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 にぶい黄褐色土
第2号土坑
A 928.153 A′
1 黒褐色土
2 暗褐色土
第3号土坑
A 928.153 A′
1 黒褐色土
2 黄褐色土
第4号土坑
A 928.953 A′
1 黒褐色土
第6号土坑
A 929.153 A′
1 黒褐色土
2 黒褐色土
第7号土坑
B B′
第8号土坑
A 928.453 A′
1
第10号土坑
A 928.853 A′
1
第11号土坑
A 928.953 A′
1
A 928.353 A′ B 928.453 B′
1 黒褐色土
2 黒褐色土
第12号土坑
第13号土坑
A 928.853 A′
1 黒褐色土
2 暗褐色土
第15号土坑
A 928.553 A′
1 黒褐色土
2 暗褐色土
第14号土坑
第16号土坑
A 928.353 A′
1 黒褐色土
第17号土坑
A 928.453
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土
5 黒褐色土
6 暗褐色土
第22号土坑
A 928.853 A′
1 黒褐色土
第36号土坑
第35号土坑
第29号土坑
A 928.228 A′
1 黒褐色土
第34号土坑
A 925.994 A′
1 黒褐色土
第33号土坑
A 925.894 A′
1 暗褐色土
B 925.994 B′
1 黒褐色土
A 926.094 A′
1 暗褐色土
第32号土坑
A 926.094 A′
1 黒褐色土
0 2 m

第31図　土坑(1)（1/60）



第32図　土坑(2)（1/60）

ない。

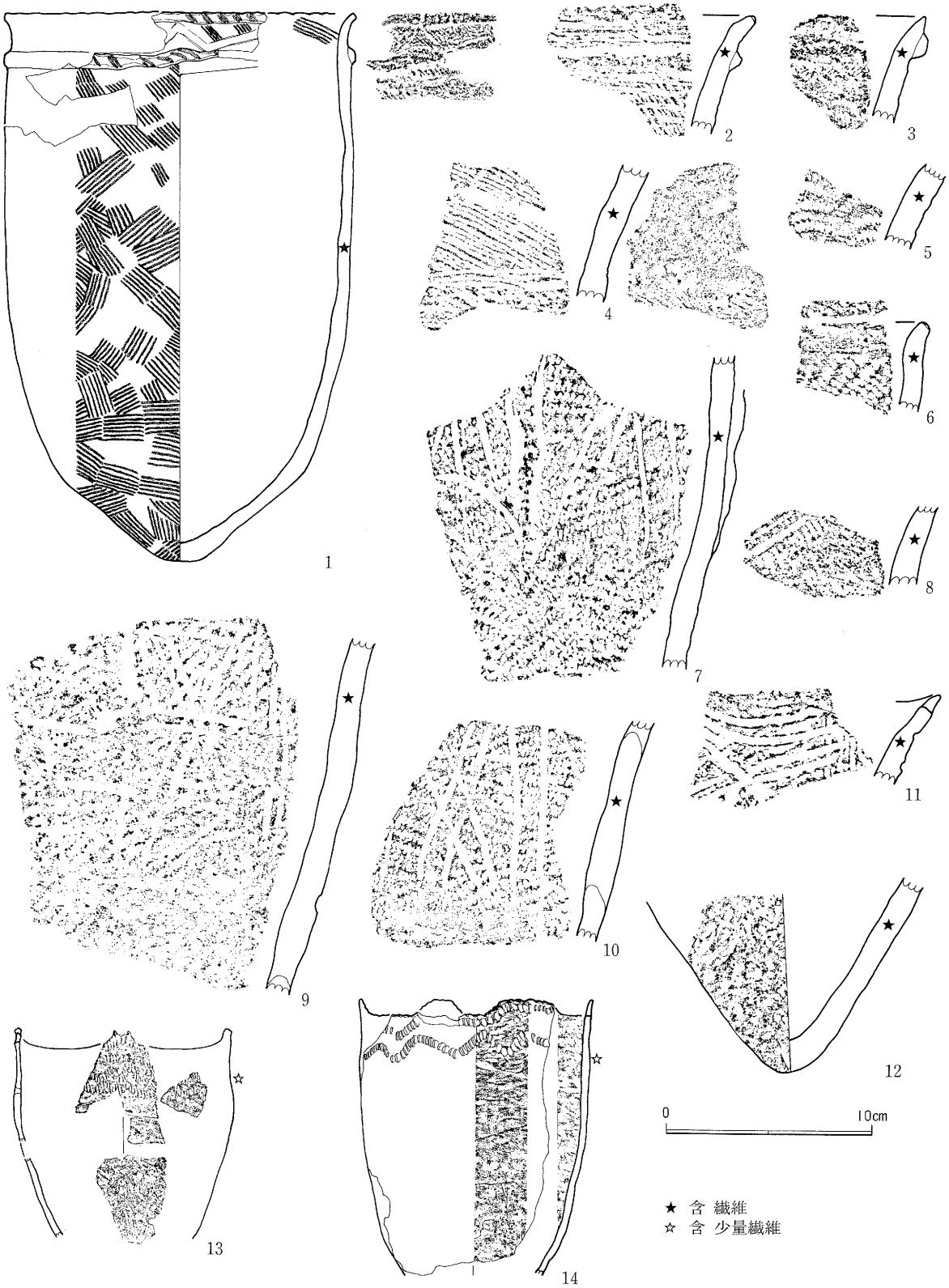
特筆すべき遺物の出土状況を示した土坑は第57号土坑で、坑底に一括性の強い９個体以上の縄文早期末深鉢片を含むにぶい黄褐色土（10YR4/3）により埋め戻し、上層にも埋め戻したと思われるローム粒子を含む黒褐色土（10YR2/3）や締まりの強い暗褐色土（10YR3/4）が堆積する人為的埋没を呈する土坑も検出されている。

土坑内に礫を含む集石土坑が17基検出されている。集石土坑に用いられている礫は地山礫に類似するものもあるが、凹石や磨石が含まれているものもあり、また、第16号土坑のように焼礫や焼土を含むものも認められた。

土坑内よりの出土遺物が少量なこともあり、その時期を決定する資料に欠けるものが大半である。しかし、土坑の類型によっては出土遺物や住居址との重複関係より、時期が判明しているものもある。第Ⅰ群１類から３類などは出土遺物より縄文早期末・前期末の時期を特定できる。

土坑の分布状態　今回の調査により得られた土坑は60基を数えるが、その量は遺跡規模を考慮するとその量は決して多いとは言い難い。これらの土坑が調査区約5,000㎡の空間より検出されているが、土坑は調査区全体に満遍なく散在するのではなく、類型によりある程度のグループを有して分布している。扇状地の扇頂部付近の調査区(調査区北西側範囲－Ａブロック)、扇端部付近(調査区東側扇状地斜面部範囲－Ｂブロック)の２ブロックにゾーニングができる。このゾーンごとにより土坑の類型に若干の偏在性を認めることができる。Ａブロックでは第Ⅰ群２類・３類が主体となり、他の類型は従属する立場を採る。ＢブロックではＡブロックとは類型構成に相違がみられ、第Ⅰ群１類が群在し、他の群が少量従属する。

土坑の性格　以上のように分類できた土坑であるが、前述のように土坑は基本的には「穴」であり、その開け方によりその性格が様々に変容してくるものと思われる。今回の調査により得られた土坑について断面



第33図　第57号土坑出土遺物（1・13・14は1/6、2～12は1/3）

形や平面プランより1群3類に分類したが、構造や分布域を大雑把に見ると大きく土坑は2分割でき、第Ⅰ群1類と2類・3類のグループに分けることができ得る。両者共に遺物の出土状況や土層の状態を考慮すると、貯蔵穴等の性格を当てはめることができようか。

向林遺跡土坑一覧表

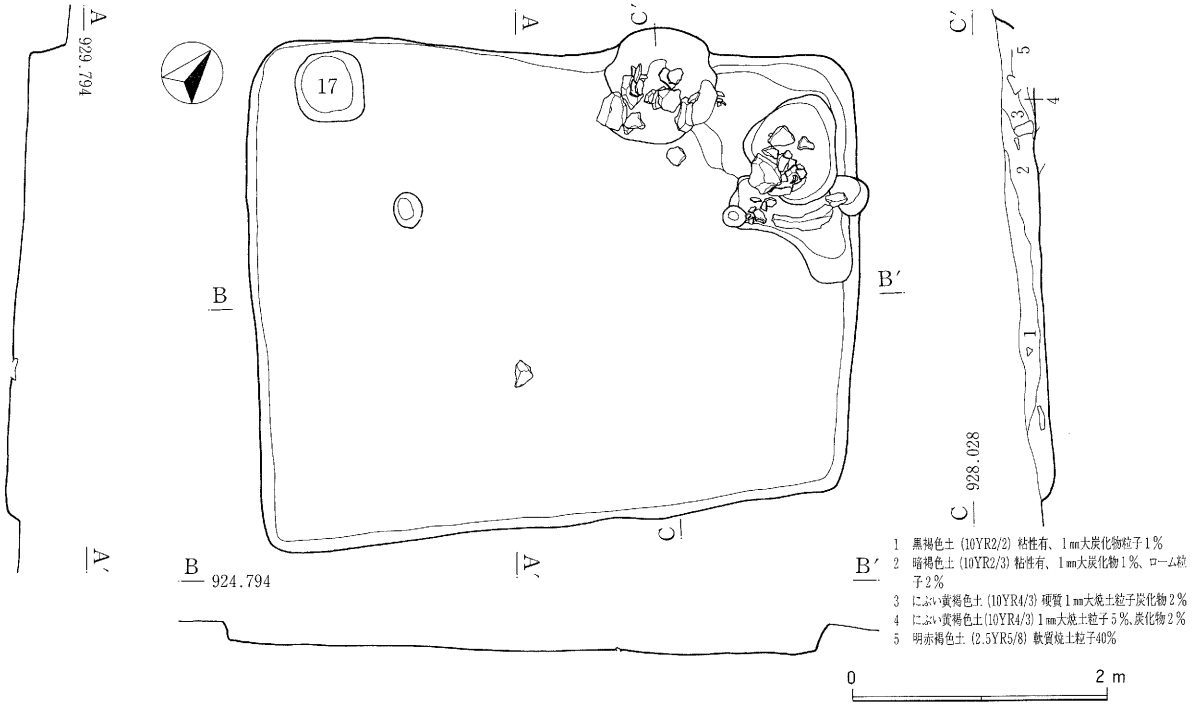
遺構番号	検出位置	上端規模(cm)		下端規模(cm)		長軸方向	深さ(cm)	出土遺物	備考
		長軸	短軸	長軸	短軸				
第1号土坑	D－9	132	101	91	80	N－18°－W	41	前期末8	第Ⅰ群3類
第2号土坑	D－9	135	126	109	99	N－79°－E	76	前期中a 4	第Ⅰ群1類
第3号土坑	D－9	132	104	99	81	N－46°－W	39	前期末22	第Ⅰ群3類
第4号土坑	C－9	95	91	74	71	N－48°－W	17		第Ⅰ群3類
第5号土坑	D－10	100	87	76	64	N－58°－E	28	早期末　前期末8	第Ⅰ群3類
第6号土坑	D－10	112	100	80	75	N－54°－W	28		第Ⅰ群3類
第7号A土坑	D－9	72	66	64	53	N－80°－E	19		第Ⅰ群3類
第7号B土坑	D－9	111	96	81	63	N－43°－E	26	前期中b 2	第Ⅰ群3類
第8号土坑	D－9	117	87	102	72	N－64°－W	11		第Ⅰ群3類
第9号土坑	D－9	133	87	96	57	N－44°－W	26	前期中a 1	第Ⅰ群3類
第10号土坑	D－10	135	120	104	85	N－76°－W	37	前期末14　前期中1	第Ⅰ群3類
第11号土坑	D－10	122	107	80	79	N－86°－W	34	前期末16	第Ⅰ群3類
第12号土坑	D－10	166	115	189	85	N－38°－W	67	前期末1	第Ⅰ群2類
第13号土坑	E－10	150	110	115	80	N－37°－E	52	前期末1	第Ⅰ群3類
第14号土坑	D－10	100	95	70	57	N－86°－E	47	前期末1	第Ⅰ群3類
第15号土坑	E－10	168	116	139	85	N－38°－W	32	前期末2	第Ⅰ群3類
第16号土坑	D－10	97	95	82	70	N－46°－W	22	前期末1	第Ⅰ群3類　16号住居址内
第17号土坑	E－10	152	120	85	81	N－84°－W	47	前期末6	第Ⅰ群3類
第18号土坑	D－9	89	66	51	46	N－18°－E	29		第Ⅰ群3類
第19号土坑	D－9	117	83	92	56	N－14°－W	19		第Ⅰ群3類
第20号土坑	E－10	93	80	72	60	N－57°－W	33		第Ⅰ群3類
第21号土坑	E－9	110	92	74	69	N－0°－E	71		第Ⅰ群3類
第22号土坑	E－10	112	85	94	75	N－27°－W	14		第Ⅰ群3類
第23号土坑	D－10	117	65	91	43	N－85°－E	20		第Ⅰ群3類
第24号土坑	E－9	121	114	79	73	N－0°－E	19		第Ⅰ群3類
第25号土坑	D－10	100	86	77	63	N－88°－W	19	前期中a 3	第Ⅰ群3類
第28号土坑	E－9	90	60	76	46	N－75°－E	7		第Ⅰ群3類
第29号土坑	E－9	118	112	99	93	N－24°－W	46	前期中神1　前期中a 1　前期末8	第Ⅰ群2類
第31号土坑	E－10	140	124	73	72	N－0°－E	62	前期末	第Ⅰ群3類
第32号土坑	G－9	132	105	99	85	N－82°－E	19	前期末1	第Ⅰ群3類
第33号土坑	G－9	175	161	149	143	N－33°－E	21	前期末9	第Ⅰ群3類
第34号土坑	G－9	136	135	112	108	N－74°－E	19	早期末1　前期末1	第Ⅰ群3類
第35号土坑	G－9	198	165	179	153	N－74°－E	26	早期末1	第Ⅰ群3類
第36号土坑	G－9	132	129	118	102	N－90°－E	30		第Ⅰ群3類
第37号土坑	G－9	147	125	92	66	N－74°－E	28	前期末19	第Ⅰ群3類
第38号土坑	G－9	130	129	91	89	N－45°－E	21		第Ⅰ群3類
第39号土坑	G－9	163	102	98	81	N－35°－W	32	前期末9	第Ⅰ群3類
第40号土坑	F－9	131	127	102	101	N－50°－E	50	前期末12	第Ⅰ群3類　10号住居址内
第41号土坑	F－10	149	121	131	87	N－38°－E	15	前期末2	第Ⅰ群3類　8号住居址内
第42号土坑	F－10	108	101	82	67	N－75°－W	48	前期末9	第Ⅰ群3類　10号住居址内
第43号土坑	F－10	109	118	67	82	N－32°－W	23		第Ⅰ群3類　10号住居址内
第44号土坑	F－10	123	95	93	66	N－25°－E	21	前期末27	第Ⅰ群3類　8号住居址内
第45号土坑	E－10	104	90	79	64	N－56°－W	29		第Ⅰ群3類
第46号土坑	E－8	132	116	115	98	N－18°－W	18	前期末10	第Ⅰ群3類　4号住居址内
第47号土坑	F－9	89	85	68	65	N－35°－W	5	前期末55	第Ⅰ群3類
第48号土坑	E－9	93	72	70	60	N－48°－E	51		第Ⅰ群3類
第49号土坑	E－9	124	105	70	73	N－35°－E	28	前期末8	第Ⅰ群3類　4号住居址内
第50号土坑	F－9	104	97	76	72	N－65°－E	9	前期末23	第Ⅰ群3類
第51号土坑	E－8	120	95	87	80	N－60°－W	48		第Ⅰ群3類　4号住居址内
第52号土坑	E－8	120	102	95	73	N－65°－W	47		第Ⅰ群3類　4号住居址内
第53号土坑	F－9	109	79	63	53	N－35°－W	25	早期末18　前期末5	第Ⅰ群3類
第54号土坑	K－5	127	109	91	67	N－32°－W	24		第Ⅰ群3類
第55号土坑	K－6	148	146	142	140	N－50°－W	52	早期末縄文13・条痕2・石山式1	第Ⅰ群1類
第56号土坑	K－6	133	128	100	95	N－60°－E	17		第Ⅰ群3類
第57号土坑	K－6	150	120	143	142	N－58°－E	76	早期末縄文・絡条体・石山式	第Ⅰ群1類
第58号土坑	G－9	103	101	55	45	N－61°－W	22		第Ⅰ群3類
第59号土坑	E－10	102	60	50	40	N－8°－E	9	早期末2	第Ⅰ群3類　7号住居址内
第60号土坑	E－10	105	73	83	50	N－58°－W	13		第Ⅰ群3類　8号住居址内

第２節　平安時代の遺構と遺物

１．竪穴住居址

今回調査された平安時代の竪穴住居址は２軒だけである。これらの竪穴住居址は全て重複関係を持たず、散在する形で検出された。時期より見ると全て平安時代後半に帰属するものであるが、詳細に見ると時間差を有し同時に存在したもので平安時代後半の時間幅の中で単独で存在していたものとして捉えることができる。検出された竪穴住居址の１軒は耕作等の攪乱のために掘り方等が削平されており、奥壁部の一部やカマド火床部の焼土しか遺存していなかった。

第11号住居址（第34・35図・図版５）



第34図　第11号住居址（1/60）

検出状況　本址は調査区の最も南西側Ｅ－６グリッドにおいてカマドと思われる石組みが検出され、その存在が明確となったものである。住居址は扇状地の中央部に占地し、隣接する住居址はない。住居址の平面プランをほぼ確認することはできたが、南東側に傾斜する地形の関係より南東側の壁の検出には手間取った。

遺構の構造　検出された平面形プランを見ると、やや南西辺が北東辺よりやや長いことより、若干ゆがんだ長方形を呈する。北西－南東辺が長く、全体的に横長の長方形プランとなる。規模は長軸4.8ｍ×短軸3.8ｍで規模的には一般的な規模を呈する。北壁側にカマドを構築しており、このカマドを通る線を主軸方向とすると、主軸方向はＮ－39°－Ｗを示す。

壁の立上りは南西19㎝、南東12㎝、北東27㎝、北西32㎝を測る。壁の掘り方は明瞭で若干凹凸を呈する。壁の立上りは直線状に立ち上がる形を基本とし、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

直接ローム面床としているが、全体的に床面は軟弱な傾向を示しているが、住居址の北側のカマド周辺は硬化し、その範囲は78㎝×45㎝の不整形な範囲が突き固めた土間状の床面の状態を呈していた。この範囲の床は小さな凹凸を呈しているが、ほぼ水平に構築されている。床面の硬化の状況等よりカマド周辺が敲き状の土間であったものと考えることができよう。カマド東側には79㎝×76㎝の不整円形の土坑が構築されてお

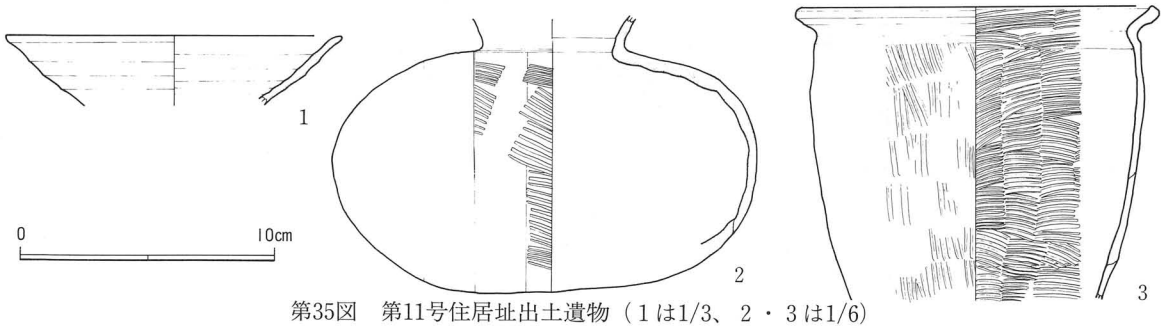
り、この土坑脇には彎曲した礫が遺存する。南肩には礫に押し潰されたような状態で須恵器坏・横瓶が検出されている。

主柱穴と思われるような柱穴の検出はなされてはいない。

カマドが住居址の北壁中央部よりやや東側に寄った位置に１ヶ所検出された。カマドの範囲は90cm×91cmの範囲に構築されている。カマド構造は石組み粘土貼りカマドであるが、遺存していたものは東西両側の袖石だけ、天井石の一部は火床に落ち込んでいた。石組み上面に貼られていた粘土は袖石部に若干と、カマド周辺に崩れたような状態で若干残存していた。このような状態から、本カマドは人為的に壊されたものと考えることができよう。カマドの掘り方は袖石を据える溝状の掘り方と、火床の浅い皿状の掘り方が検出されたが、煙道に関わる掘り方等は確認されてはいない。なお、火床範囲には硬く締まった焼土が検出され、その厚さは９cmを測る。カマドの天井石と一緒に土師器長胴甕片がつぶれたような状態で検出されている。

覆土は黒褐色土（10YR2/2）と暗褐色土（10YR3/3）の２層で、床上に浮く形で礫が散在する。

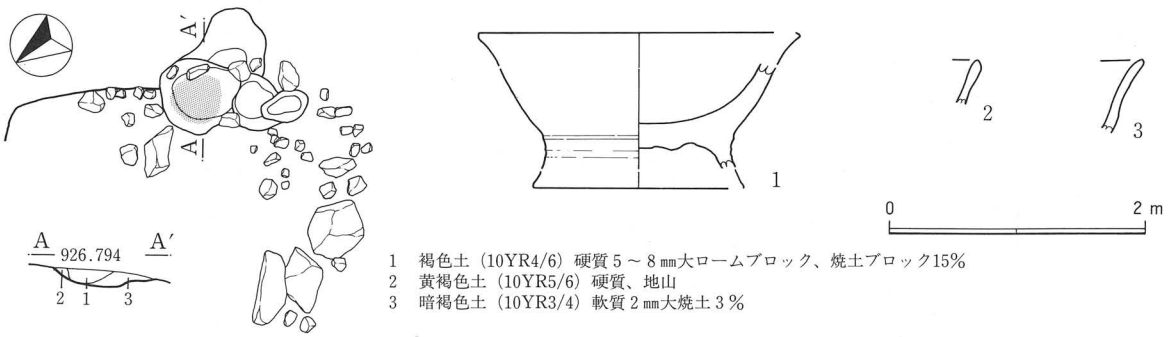
遺物の出土状況　出土遺物は少なく住居址のカマドとカマド脇の土坑内から出土している。出土した土器



第35図　第11号住居址出土遺物（１は1/3、２・３は1/6）

の内訳は、須恵器坏１個体、須恵器横瓶１個体、土師器長胴甕１個体が検出されているに過ぎない。検出された遺物等より９世紀末に帰属するものと考えられる。

第13号住居址（第36図）



1　褐色土（10YR4/6）硬質５～８㎜大ロームブロック、焼土ブロック15%
2　黄褐色土（10YR5/6）硬質、地山
3　暗褐色土（10YR3/4）軟質２㎜大焼土３%

第36図　第13号住居址（住居址平面図は1/60、１～３は1/3）

検出状況　本址は調査区の北側に位置し、扇状地の東側斜面部に占地している。南側に第９号住居址と隣接する。住居址は耕作等の攪乱のために掘り方等が削平されており、奥壁部の一部やカマド火床部の焼土しか遺存しておらず、平面プランを把握することはできなかった。検出し得たカマド周辺に検出された掘り方から類推すると、東側にカマドを有する住居址を想定できよう。

直接地山を床としているために地山礫が突出しており凹凸が著しい。

カマド火床と掘り方が検出されているに過ぎない。

遺物の出土状況　出土遺物は土師器坏片３が検出されているだけである。検出された遺物から10世紀後半に帰属するものと考えられる。

第３節　縄文時代・平安時代・近世の遺物

１．縄文土器の概要

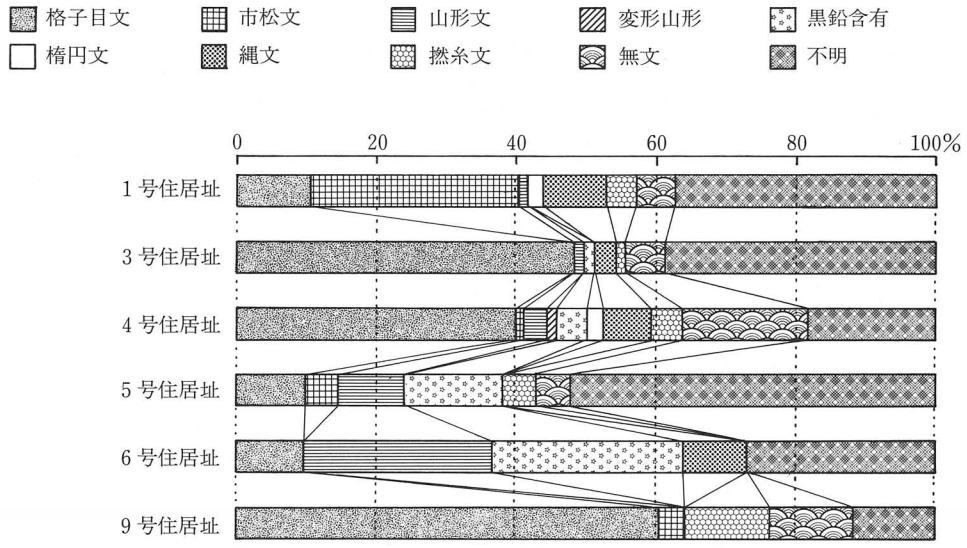
今回の調査により得られた縄文土器片は、早期押型文を中心に前期・後期の土器片が得られているが、そのほとんどを破片が占め復元できた個体は５個体と少ない。

時間的な制約や紙面の都合から、今回の調査により得られた土器片全てを資料化し、ここで図示し観察することができないために、本節では遺物整理の段階で得られた縄文土器の概要について記述したい。

縄文土器の時期について　今回の調査により得られた縄文土器を時期により見ると、縄文時代早期初頭押型文、早期末絡条体圧痕文・早期末石山式、前期中葉神ノ木式・諸磯ａ式・諸磯ｂ式、前期末諸磯ｃ式、後期初頭称名寺式までの土器が断続しながら検出されている。

縄文時代早期土器の概要　早期の資料は断片的に早期初頭、早期末の資料が得られている。

早期初頭押型文の土器群　住居址から得られた資料の中心をなす。押型文は格子目文・市松文・山形文・楕円文の類型が認められる。これに従属する形で、縄文・撚糸文施文が含まれている。これらの類型は住居址によりやや構成に差がみられ、格子目文が主体となるもの、市松文が主体となるもの、山形文が主体となるものの３者が認められる。押型文はその特徴より立野式に帰属するものと考えられ、胎土内に黒鉛を含有する特徴的な沢式も第３号・第４号・第５号・第６号住居址より出土している。



第37図　住居址出土押型文の文様構成

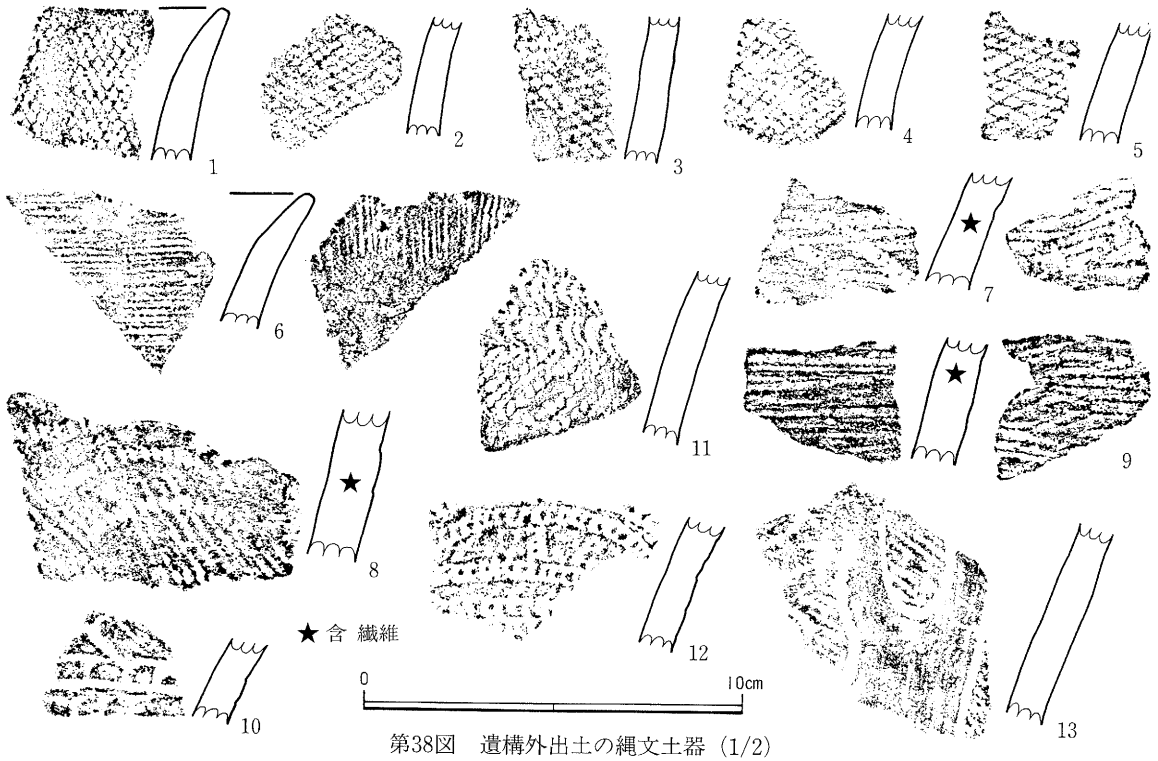
早期末絡条体圧痕文の土器群　最もまとまったものが第57号土坑から出土している。地文は撚糸文・縄文が認められ、これに弧状、鋸歯状モチーフの絡条体圧痕文が加わる。口縁部には１条の貼付隆帯が巡り、この隆帯上にも絡条体圧痕文が施文されるものもある。隆帯と口唇部間には半割竹管状工具を用いたと思われる不明瞭な擦痕状の沈線が施文されているものもある。これらの土器群に東海系の石山式が供伴している。

前期の土器群　遺構外より前期中葉に帰属する諸磯ａ・ｂ式が若干検出されている。第７号住居址や土坑内からは、半割竹管状工具による割合ラフな平行沈線を地文としており、ボタン状の貼付文を持つ諸磯ｃ式が検出されているが、結節浮線が貼付されるものや結節沈線が施文されるものは認められてはいない。

縄文時代後期初頭の土器の概要　第38図13は不明瞭な沈線により鉤の手状にも見える区画を施文し、区画内に縄文を充填するもので称名寺式に帰属させることができよう。

土器群の構成とその特徴　今回の調査により得られた土器群を時間軸で並べると、早期前半・早期末・前期中葉から末・後期初頭と断続的に資料が得られている。前期中葉土器群・後期初頭の土器群は少量であり、土器の量より考えると前期中葉・後期初頭は集落としての性格が稀薄であったと考えることができる。

今回は検出された土器群を概観してきただけで、詳細なる分類や編成作業を行ってはいないために、大まかな傾向を摑んだに過ぎず、今後土器を再検討することにより、より本遺跡の土器群の在り方が明確になるものであろう。



第38図　遺構外出土の縄文土器（1/2）

2．平安時代土器・近世陶磁器の概要

今回の調査により第11号・第13号住居址から少量ではあるが、平安時代の須恵器・土師器が得られている。器種的には須恵器の場合坏と横瓶が認められ、土師器では黒色土器坏、高台付坏、長胴甕が認められる。これを住居址別でみると、第11号住居址では土師器黒色土器坏、須恵器坏・横瓶が、第13号住居址では土師器高台付坏が認められ、住居址ごとで器種組成に差があることがわかる。

近世の陶磁器は遺構外より６点が検出されている。内訳は鉄釉天目茶碗１、鉄釉縁反碗１、灰釉碗１、常滑甕１、染付皿１が得られている。鉄釉天目茶碗、鉄釉縁反碗、灰釉碗は瀬戸本業焼に比定でき、18世紀後半から19世紀に帰属するものと思われる。染付皿は版型による青海波文がプリントされており、近代末に帰属するものと考えられる。この他に寛永通寶が採集されている。

3．石器の概要

今回の調査により135点の石器が検出されている。これらの殆どは遺構内特に住居址内からの資料であり、住居址単位の石器組成を明確に把握することができた。これら石器の器種について概観すると、原材で分類でき黒耀石を素材とする石器では石鏃・ドリル・スクレイパーが認められ、黒耀石以外を素材とする石器では打製石斧・磨製石斧・横刃型石器・礫器・凹石・磨石が認められた。

石器・剝片等の分類とその性格　黒耀石以外を素材とする石器を器種別にその形状や特徴より細分すると、

磨製石斧Ⅰ類　定角式のもの（第7図44）　礫器Ⅰ類　素材礫の一端に剥離調整を加え刃部を作り出しているもの（第17図147･148）　砥石　平面形が台形を呈し、断面が扁平となる両面･側面に磨面を有しているもの（第18図145）　凹石Ⅰ類　素材礫の面に孔を有するもので、片面だけのもの　凹石Ⅱ類　孔が両面にあるもの　凹石Ⅲ類　磨石と併用するもの　磨石Ⅰ類　片面に磨面を有するもの　磨石Ⅱ類　両面または全面に磨面を有するもの　磨石Ⅲ類　断面が三角形を呈し、素材の稜部に磨面を有するもの　磨石Ⅳ類　片面または両面と側面に磨面を有するものに類型化することができ、多種の礫を素材とした石器が遺跡内で用いられていたことが窺える。

黒耀石を素材とする石器では石鏃が主体を占める。平面形状において細分が可能であるが、特徴的なものをあげると、局部磨製石鏃（第16図133）や逆Ｙ字形のもの（第16図126･127･132）、凸基有茎形（第7図42）が認められる。詳細に石鏃を観察すると、未調整部分を残しているものが認められ、石鏃全てが道具として利用されていたとは限定できず、製作途上の未製品も含まれている。

今回の調査において907点（3,993.35ｇ）にのぼる黒耀石製の剥片･砕片が検出されている。これらを分類すると、道具としての石器は石鏃・石鏃ブランク・ドリル・スクレイパーが認められる。これらの石器に加えて石器の素材となる黒耀石剥片類・素材礫等も検出されている。これらの黒耀石剥片類・素材礫等は剥離状況や形状等より見るとある程度の群を構成し、次のようにグルーピングが可能である。　素材粒　全面に自然面を持ち、何らの剥離が行われていない状態のもので、形状は粒状のものと角柱状のものがある。　砕片　素材粒に多方向から不規則な剥離がなされ、一部に自然面を残留するものもある。石核のように一定の剥片を剥離しようとするような意図が認められない。　両極打法による砕片・剥片　両極打法による痕跡である階段状剥離等の特徴を残す特徴的な群で、両極打法による砕片と捉えられよう。　石核　砕片や裂片のように剥離が不規則ではなく、一定性を持ち剥片剥離を目的としたもの。　剥片Ⅰ類　縦長剥片を一括した。主要剥離面を有し表面に１・２条の稜が、剥片側辺に沿って平行に走る規則的なものが含まれている。打面は自然打面と調整打面が認められる。　剥片Ⅱ類　形状はⅠ類ほど規則的ではなく、横長のもので、主要剥離面を有する。打面は点打面のものと自然打面のものが認められる。　剥片Ⅲ類　Ⅰ・Ⅱ類と比較すると小型で形状も一定ではなく不規則なものである。主要剥離面を有し、表面には交互剥離等が見られ自然面を残留するものはない。剥片は薄く打面は点打面が中心となる。　剥片Ⅳ類Ａ　極小剥片の類型で、薄く主要剥離面を有し、表面には交互剥離が認められる。剥片の状況より石器生産の際に生じた剥片として捉えることができよう。　剥片Ⅳ類Ｂ　Ⅳ類Ａと同様に極小剥片の類型であるが、形状が不整形で裂片を小型化したようなものも含まれている。剥片などの分類により遺跡内で石器生産が行われていたことがある程度把握できた。剥片等の出土量から考えると、第１号・第４号住居址内を中心に黒耀石製石器生産が行われていたことが予測できる。

石器の組成と特徴　今回の調査により得られた石器の種類は10種に及び、打製石斧11、磨製石斧１、横刃型石器５、礫器４、凹石11、磨石29、砥石１（黒耀石以外を用いる石器）、石鏃28、ドリル１、スクレイパー８（黒耀石を用いる石器）が得られている。これらの石器の内縄文早期押型文期の資料について他の遺跡と比較すると、使用痕の認められる剥片の割合が低い点に特徴を持つ。

これらの石器組成を時期別の住居址単位でみると、縄文早期の組成は植物加工具としての道具である磨石が主体を占め、狩猟具としての石鏃等が従属する。他の石器の点数は少なく特に加工具が貧弱であるが、その組合せは典型的な早期押型文期の石器組成と考えられる。少量であるが磨製石斧や礫器が含まれている点等を考慮すると、道具に数量差こそあれ割合完成した道具の組合せを有しているものと捉えられる。

向林遺跡遺構別石器等出土一覧表

遺構番号	黒耀石総重量(g)	黒耀石総点数	素材粒	砕片	両極	石錐	剥片I	剥片II	剥片III	剥片IVA	剥片IVB	石鏃	石鏃ブランク	ドリル	スクレイパー	打製石斧	磨製石斧	横刃	礫器I類	凹石			磨石				剥片	砥石
																				I類	II類	III類	I類	II類	III類	IV類		
1号住居址	240.8	103		23	26		8	26	8	4	5	1	1		1		1		2						1	1		
2号住居址	42.45	10		6			1	3				1												1				
3号住居址	190.7	83		29	9		5	17	16	5	2	2	1									1			2			
4号住居址	1,752.55	439	2	217	12		7	99	76	26		16	9		5			1	2	1	1	1		1	4	2	3	1
5号住居址	143	38		17				13	5	3		2								1								
6号住居址	171.75	26		18	1			2	5																		1	
7号住居址	813	110	2	39	2	8	3	36	18	2		1	3	1	1	8		4			3		1	1	1		8	
8号住居址	140.2	22	1	13			4	2	2														1		3	1		
9号住居址	407	47		22	3	2	1	9	10				2								1			1		2	4	
10号住居址	12	3		1				2						2												1		
11号住居址	31	14		6	3			2	4			1			1													
14号住居址	48.9	12		4			1	4	3			1																
1号土坑																1												
4号土坑												1																
7号土坑													1												1			
11号土坑												1																
13号土坑																												
30号土坑																									1		1	
35号土坑																1												
36号土坑																									1			
37号土坑																1											1	1
39号土坑																									1			
42号土坑																					1							
44号土坑												1									1							
50号土坑																									1			
合　計	3,993.35	907	5	395	56	10	30	215	147	40	7	28	17	3	8	11	1	5	4	2	7	2	2	4	16	7	18	2

第Ⅴ章　調査の成果と課題

第１節　向林遺跡の縄文時代早期集落の概要

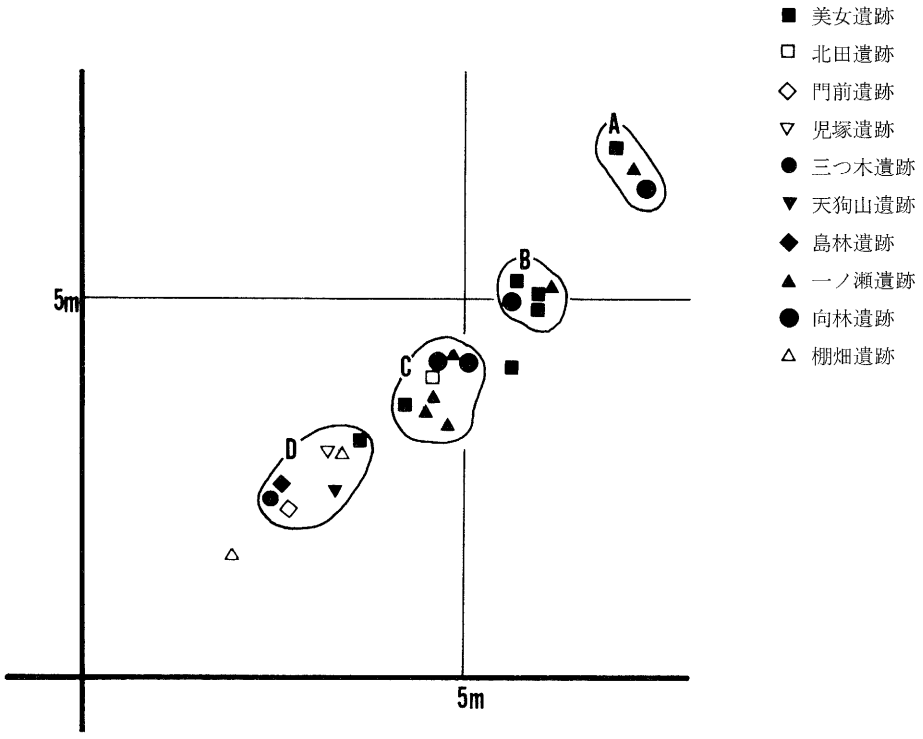
１．住居址の構造と規模

住居址の構造　向林遺跡で今回の調査により検出された縄文時代早期前半の竪穴住居址は10ヶ所を数える。これらは近接状況を有しているものの、重複関係を有しているものはない。しかし、地形の関係や畑地の造成等により住居址の一部が損失しているものが７ヶ所あり、構造等について明確にし得たものは少数であるが、推定でき得る住居址も含めて住居址構造の所属性（平面形・規模・主柱穴配置・炉址）について検討してみる。

住居址の平面プラン　検出された住居址の平面プランを大別すると、円形を基調とする住居址－Ⅰ群と、楕円形を基調とする住居址－Ⅱ群に分類することができる。詳細にこれらの群を見ると、Ⅰ群は正円に近いもの－ａ類、不整円形－ｂ類が認められるが、Ⅱ群の類型を数量的に見ると、ａ類に帰属するものは皆無で、ｂ類が全を占める。Ⅱ群は楕円形のもの－ａ類、ややコーナー部が張るもの－ｂ類が認められるが、量的には第８号住居址１ヶ所だけである。

市域において本遺跡と同期の竪穴住居址が検出されている天狗山遺跡(文献５)や、一ノ瀬遺跡(文献６)と比較すると、天狗山遺跡の場合は不整隅丸長方形、一ノ瀬遺跡では不整円形と不整楕円形のものが認められ、本遺跡の住居址の平面構成は一ノ瀬遺跡と類似する傾向を持つ。

住居址の規模　今回の調査により検出された住居址はその多くが攪乱や流出しており、規模を的確に把握し得たものは少なく、全体傾向を的確に把握することはできなかったが、全体像の把握できた住居址のデー



第39図　長野県内縄文早期立野式期の竪穴住居址の規模

タから単純に住居址の面積だけで分類すると、20㎡以下(直径５ｍ前後)－Ａ群、25㎡以下(直径5.5ｍ前後)－Ｂ群、40㎡以下(直径７ｍ前後)－Ｃ群の３群に分類することができる。規模別の軒数はＡ群－２、Ｂ群－１、Ｃ群－１でありＡ群が主体を占める。最大の規模を有した住居址は第４号住居址である。

住居址の平面プランより規模を考えると、円を基調とするＩ群が楕円形を基調とするII群に比べて大型のもの（Ｃ群）が主体を占める。特に第４号住居址は規模的に大型に属するもので、検出された住居址が同時に存在したとすると、大型の住居址、中型の住居址により本遺跡の集落は構成されていると考えることができよう。

県内における縄文早期立野式期の住居址・集落址の調査は、飯田市美女遺跡等においてなされ徐々にその様相が解明されつつある。これらの資料と本遺跡の住居址の規模について比較すると、第39図(註.１)のようになる。これによると、直径が７ｍ前後のグループ（Ａグループ）、直径が５ｍ～４ｍ前後のグループ（Ｂ・Ｃグループ）、直径が３ｍ前後のグループ（Ｄグループ）の３グループが認められ、本遺跡のＣ群とした大型の規模を持つ住居址は、飯田市美女遺跡ＳＢ21（７ｍ×７ｍ）、塩尻市八窪遺跡(文献７)第３号住居址（７ｍ×７ｍ）、一ノ瀬遺跡第63号住居址（7.19ｍ×6.65ｍ）から検出されている。また、樋沢式期においては塩尻市向陽台(文献８)遺跡第１号住居址（7.3ｍ×7.1ｍ）、第３号住居址（8.8ｍ×8.6ｍ）が検出されており、本遺跡の例が突出した例でないことが理解できる。

竪穴住居址の構造　竪穴住居址内には一般的には柱穴や炉址が検出されるのが一般的であるが、今回の調査において検出された住居址からは、第14号住居址を除き他のものでは柱穴や炉址を確認することができなかった。市域における同期の住居址においても柱穴や炉址を具備しないものが主体を占めているが、県内の諸例の集成より立野式期の住居址について考察した馬場(文献９)氏の見解では、「小型で炉址を伴わないものと、規模が大きく多く地床炉を伴うものがある。」としており、住居址の定型化が指摘されている。しかし、本遺跡において検出された第４号住居址や一ノ瀬遺跡第63号住居址、塩尻市八窪遺跡第３号住居址のように大型のものでも炉址を有していないものも認められ、この差は何に起因するか今後の課題である。

柱穴配列と竪穴住居址の構造　今回調査された縄文早期前半の住居址で、柱穴の検出されたものは第14号住居址１軒だけである。掘り方が浅く、柱穴配列に規則性が認められない点などを考慮すると、主柱穴とは考えにくいが、これらの孔を積極的に柱穴として評価し、柱穴が認められている他の遺跡例と比較してみると、飯田市美女遺跡などに見られる不規則な柱穴配列と、壁際付近への柱穴の掘り込み、深さもあまり深いものを有さない点などを加味すると、第14号住居址に見られるものも柱穴として評価すべきであろう。また、壁際に柱穴が巡る傾向は、縄文草創期のお宮の森遺跡や縄文早期前半の諸遺跡において認められる傾向で、市域においては住居址内ではないが、壁外周に柱穴が巡るものを棚畑遺跡に認めることができる。

炉址・床の構造　今回調査が行われた住居址の全てにおいて、炉址を検出することができなかった。また、住居外についても縄文早期に帰属する焼石土坑や焼土址も検出されておらず、遺構の構成に欠落する部分がある。床面は中央部に向かって傾斜する傾向のものが中心となり、掘り方等も不規則で皿状の立上りとなる構造となる。

２．集落の形態

集落の立地　第II章第１節１で遺跡の立地している地形の概要について記述しているとおりに、本遺跡は扇状地に展開する。この扇状地は割合傾斜がきつく詳細に微地形を観察すると、扇央部を分割するように小規模な入り組み谷が南北方向に走っている。この小規模な谷が分岐し始める部分より上部（扇頂部に近い範囲）に住居址が群在する。この範囲は扇状地内で最も広がる扇端部に比べて傾斜が緩やかであり、安定した

地形となっている。

集落のかたち　今回の調査は遺跡の一部を調査したに過ぎず、集落の全体像を把握するまでには至ってはいない。しかし、立地状況と住居址の分布状況より考えると、集落は扇頂部の割合平坦な部分に等高線に沿った形で帯状に分布する。住居址の規模や構造差による分布の偏在性は認められず、様々なタイプのものが混在する形を採る。隣接関係はあるものの重複関係を有していない点を考慮すると、今回検出された住居址は同時存在した可能性が強く、縄文早期前半立野式期の集落を考える上に重要な資料となろう。

3．周辺遺跡との相互関係と本遺跡の性格

周辺の遺跡との相互関係　霧ヶ峰南麓には多くの遺跡が立地、それらが霧ヶ峰南麓から流れ下る河川による扇状地単位で大きな遺跡群を構成している。この分類に従うと本遺跡は桧沢川による扇状地グループに帰属している。桧沢川扇状地グループ群の中心となる拠点的集落は駒形遺跡であるが、駒形遺跡は縄文早期からの長期継続型の集落であり、何らかの形で本遺跡との関係を有していたものと考えられるが、現段階の資料よりそれを把握することは難しい。

本遺跡の性格を如実に現している事象の把握はできてはいない。出土した石器類の組成に着目すると、縄文早期前半では磨石を中心とする植物加工具が主体を占め、石鏃などの狩猟具が従属する傾向を示す。このことは、当時この地における活動が植物主体のものであったものと類推できる。

本遺跡のような縄文早期前半集落の把握は、一ノ瀬遺跡に次ぐ発見である。同時期の遺跡は市域において霧ヶ峰南麓や入笠山山麓、八ヶ岳西南麓裾部に認められるだけで、縄文中期集落の繁栄する八ヶ岳西南麓の台地上には見られない。このような時期による遺跡の分布の差異は如何なる事象に起因するものであろうか今後考えなければならない問題である。

（註・参考文献）

（文献１）1961　宮坂英弐　「縄文早期終末の住居址－茅野市駒形遺跡出土－」『信濃』　13-8　信濃史学会

（文献２）1966　宮坂英弐　「長野県茅野市駒形遺跡」『日本考古学年報』14　日本考古学協会

（文献３）1997　長野県教育委員会　「Ⅰ　農業基盤整備事業に係る茅野市、原村内の分布調査－八ヶ岳西南麓縄文時代遺跡分布調査－１　茅野市米沢北大塩地区」『大規模開発事業地内遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－』

（文献４）1979　文化庁　「参考資料・八ヶ岳西南麓（茅野市・原村・富士見町）遺跡一覧表」『広域遺跡保存対策調査研究報告3』

（文献５）1993　百瀬一郎　『天狗山遺跡』　茅野市教育委員会

（文献６）1997　守矢昌文　「茅野市一ノ瀬遺跡の調査」『第９回諏訪地区遺跡調査研究発表会レジメ』　諏訪考古学研究会

（註．１）　第39図の長野県内縄文早期立野式期の竪穴住居址の規模におけるデータは、『美女遺跡』表49各遺跡検出竪穴住居址属性表に基づき作成した。

（文献７）1988　百瀬長秀　「６　小結」『長野県中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書２　八窪遺跡』　長野県教育委員会

（文献８）1988　小林康男　「第Ⅲ章第３節６　１）(3)」『一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　塩尻市教育委員会

（文献９）1998　馬場保之　「第Ⅳ章　遺構」『美女遺跡』　飯田市教育委員会

(1)　遺跡遠景

(2)　調査区全景

(3)　第 1 号住居址

図版 2

(4)　第 2 号住居址

(5)　第 3 号住居址

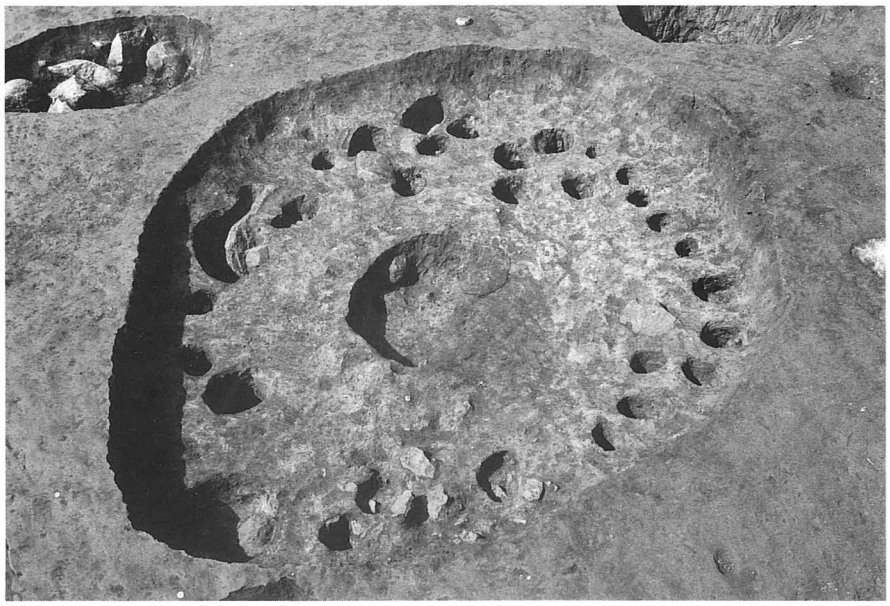
(6)　第 4 号住居址

(7) 第 4 号住居址
遺物出土状況

(8) 第 5 号住居址

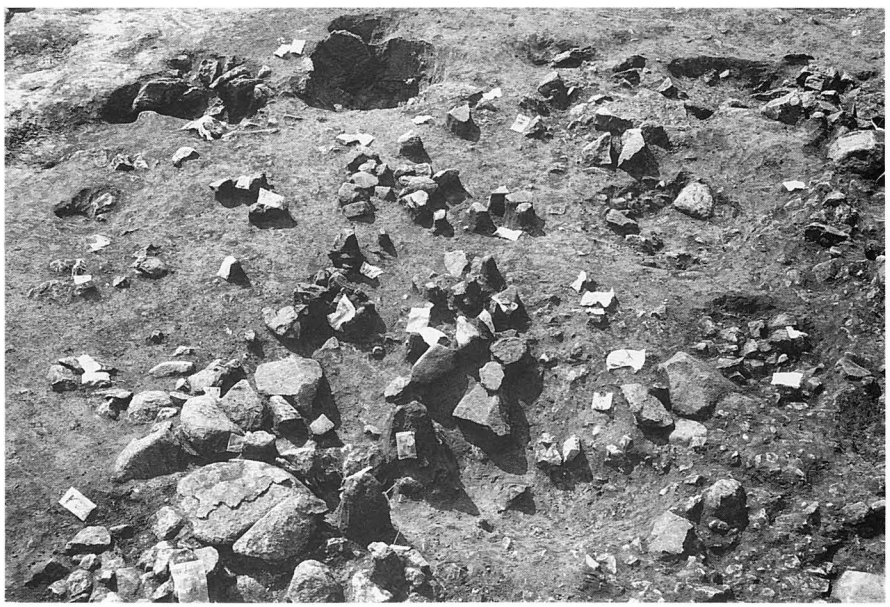
(9) 第 6 号住居址

図版 4

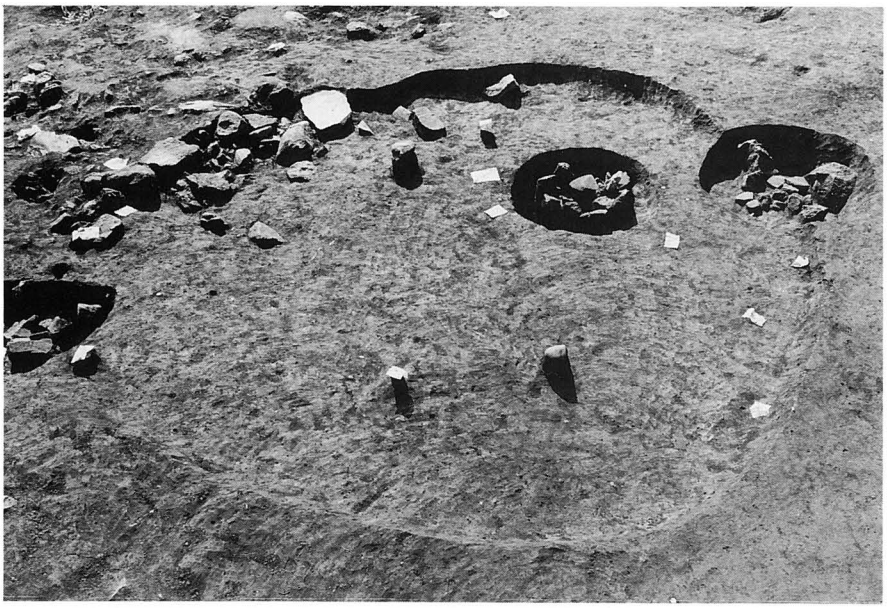


(10)　第 7 号住居址

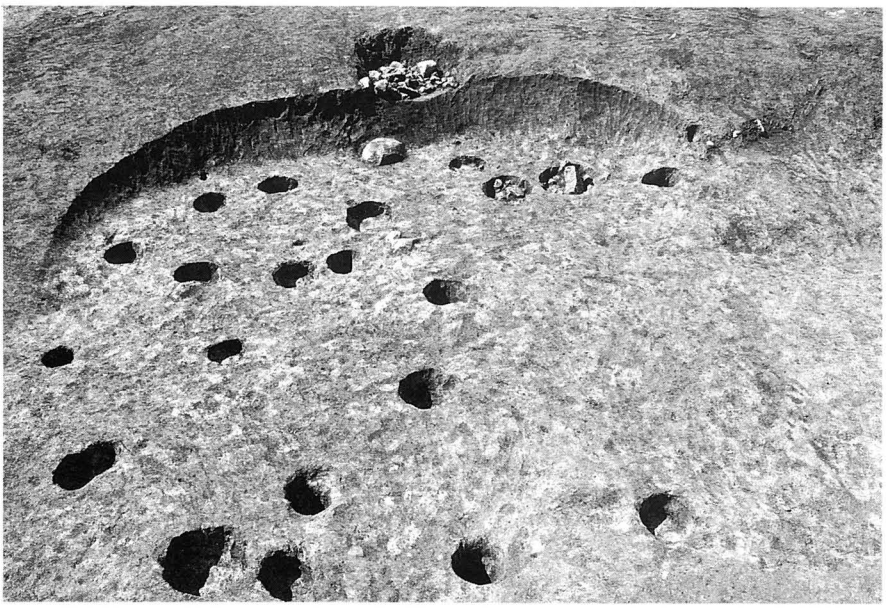
(11)　第 8 号住居址



(12)　第 9 号住居址



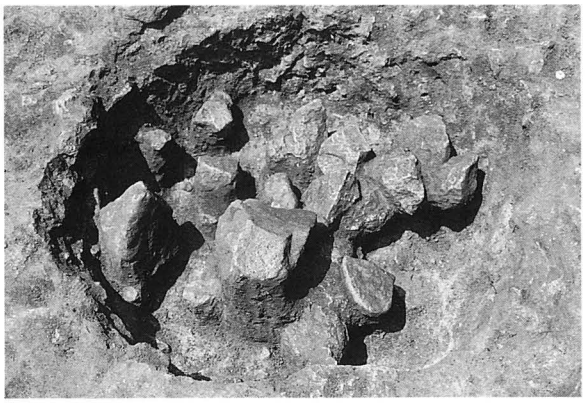
(13)　第10号住居址



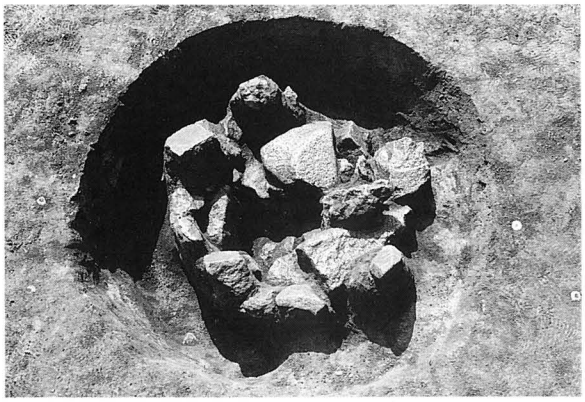
(14)　第14号住居址

(15)　第11号住居址

図版 6



⑯　第16号土坑

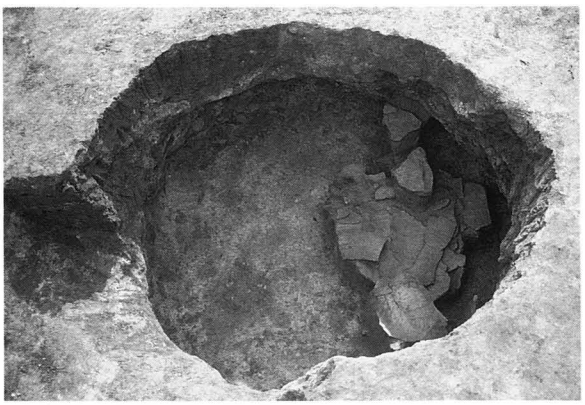


⑰　第42号土坑

⑱　第43号土坑

⑲　第35・36号土坑

⑳　第33号土坑



㉑　第57号土坑

㉒　第７号住居址遺物出土状況

㉓　第11号住居址遺物出土状況

報告書抄録

ふりがな	むかいばやしいせき
書名	向林遺跡
副書名	平成10年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	守矢昌文
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391-8501　長野県茅野市塚原二丁目6番1号　TEL 0266-72-2101
発行年月日	西暦1999年　3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
むかいばやし 向林	ながのけんちのし 長野県茅野市 よねざわ 米沢 むかいばやし 向林	20214	37	36度 2分 6秒	138度 11分 4秒	19980615 ～ 19981030	5,000㎡	県営圃場米沢地区に伴う時前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
向林	集落址	縄文	竪穴住居址　12	早期押型文土器片 スクレイパー・石鏃 剥片・砕片・特殊磨石	縄文時代早期の集落址
				前期諸磯ｃ土器片 石鏃・剥片・磨石 打製石斧	縄文時代前期末の集落址
			土坑　60	前期諸磯ｃ土器片	
	集落址	平安	竪穴住居址　2	須恵器坏・須恵器横瓶・土師器甕	平安時代の集落址

向林遺跡

—— 平成10年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

平成11年3月19日　印刷
平成11年3月24日　発行

編　集　茅野市教育委員会
発　行　長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
☎（0266）72－2101㈹
印　刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎（026）244－0235㈹